318
532

始

戰袍餘薰

懷舊錄

日清戰役之卷

第一輯

有終會發行

戰袍餘薰

懷舊錄

日清戰役之卷

第一輯

大正
15. 2. 18
内交

318-532

戰袍餘薫

懷舊錄 第一輯 目次

口繪
聯合艦隊旗艦松島
第一遊擊隊旗艦吉野
砲艦赤城
水雷艇第六號
はしがき　會長　寺垣猪三……一
挨拶　海軍中將　釜屋忠道……三
豐島の役
開戰前後の實況

浪速の行動　海軍少將　小花三吾……一六
通信船より見たる豐島沖の海戰と其の前後　海軍少將　近藤常松……二一

黃海の役

橋立の行動　海軍中將　江口鱗六……三四
赤城の行動　海軍中將　佐藤鐵太郎……四〇
赤城の苦戰　海軍軍醫少將　臼井宏……五〇
西京丸の行動　海軍中將　佐藤皐藏……五四
佐藤皐藏中將の御話に就て　釜屋忠道……六〇
釜屋佐藤兩中將の御話に就て　佐藤鐵太郎……六四
比叡の突貫に就て　海軍大將　男爵　日高壯之丞……六六

大纛下に在りて　海軍中將　川島令次郎……七〇

威海衛の役其の他

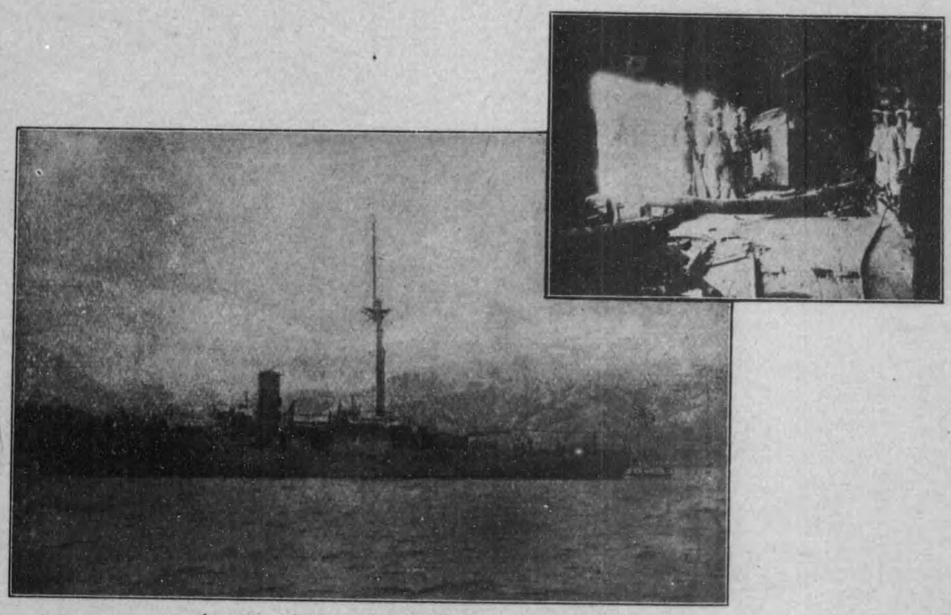
防材破壞に就て　海軍大將　鈴木貫太郎……七三
威海衛の役前後の逸話　海軍大佐　吉川孝治……八四
大同江に於ける天然船渠に就て　海軍大佐　笠間直……八七
第四遊擊隊の一艦として天龍の行動　海軍中將　堀内三郎……九一
戰役中航海に關する事ども　海軍中將　石橋甫……一〇三
戰役中龍田の廻航に就て　海軍中將　寺垣猪三……一〇八
龍田廻航中國際關係等に就て　海軍少將　庄司義基……一一九

餘錄

彈片記　海軍中將　男爵　坂本俊篤：一六
題拿破崙言行錄後
詠懷二則：一三
丁提督使用の官印

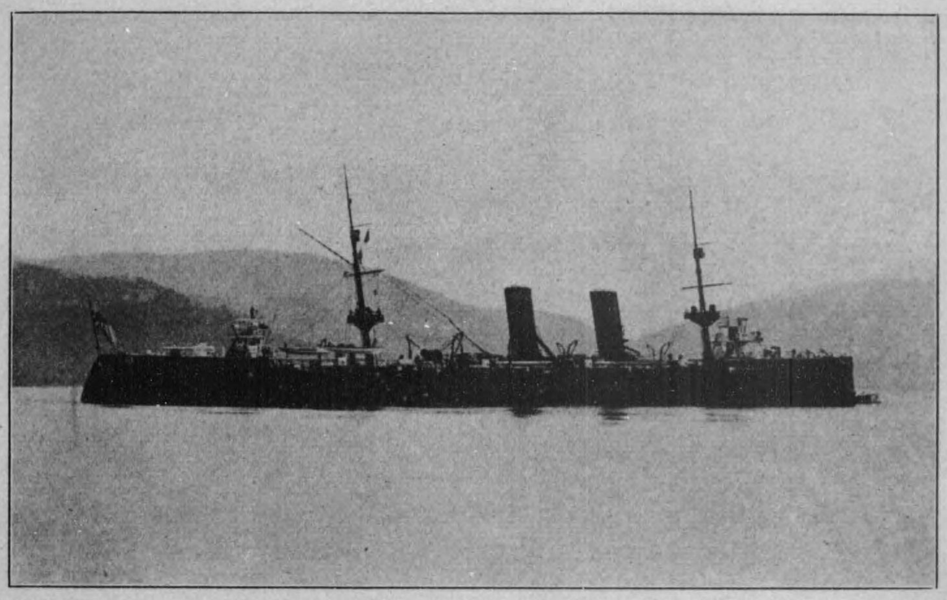
附錄

第一表　豐島海戰參加士官
第二表　黃海海戰參加士官
第三表　明治二十八年一月三十日威海衞總攻擊參加士官
第四表　明治二十八年一月三十日威海衞總攻擊特別任務艦船乘組士官
第五表　威海衞襲擊參加士官及准士官

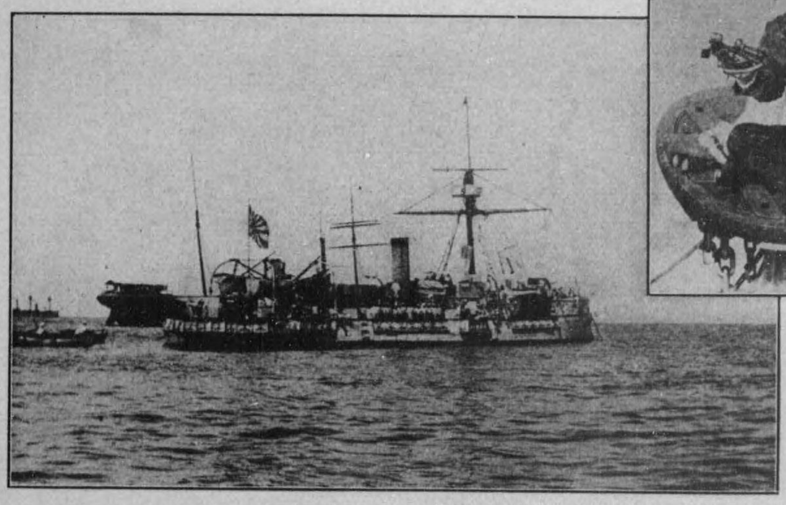


右上は敵彈の爲に射落され大る松島前部十二糎砲

聯合艦隊旗艦松島

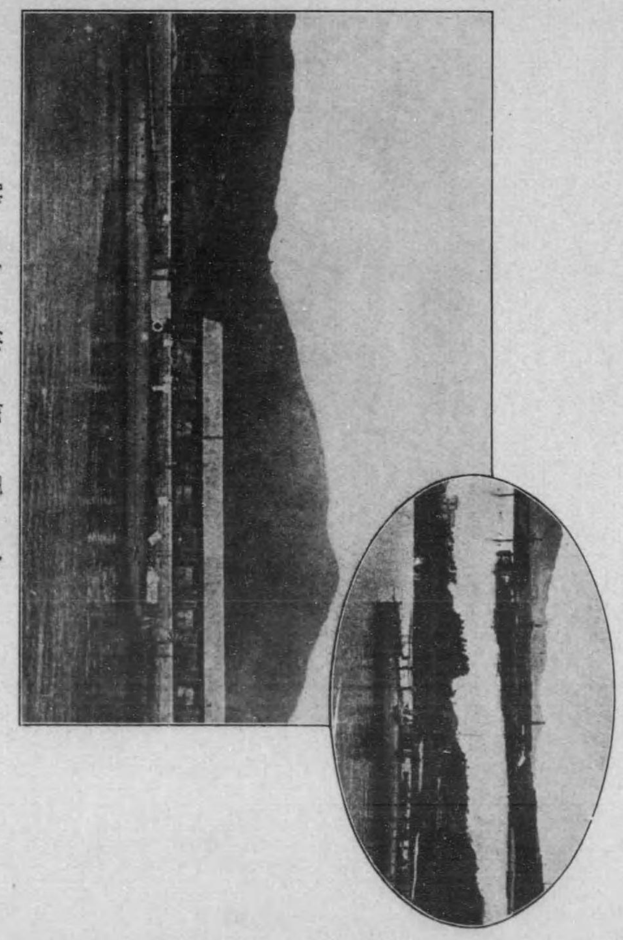


第一遊擊隊旗艦：吉野



砲艦赤城

黃海海戰後根據地に凱旋當時撮影せるもの。
右上は戰死者少尉候補生橋口戸次郎奮戰中の畫像で（橋樓上に於て敵艦距離觀測中）、記念の爲め同級者の調製せるもの。



水雷艇第六號

水雷艇第六號は鈴木貫太郎大尉艇長として威海衛の防材破壞に從事す。

右上は威海衛の港口附近に沈沒せる清艦威遠、其の下方は之を撃沈した水雷艇第十一號（艇長大尉笠間直）。

はしがき

明治二十七八年戰役は我國開闢以來外國と兵を交へた大規模の戰爭の嚆矢であつて、對手の清國は當時眠れる獅子と稱せられ、その兵備殊に海軍力に於て我を凌駕してゐたのであるから、時の內閣諸公は素より苟くも國家觀を有するものゝ齊しく憂慮措く能はざる所であつたのである。それより十年後に起つた日露戰爭は更に之を大にしたものであつて、國運を賭するといふ點に於て、前者とは到底同日

の論ではなかつたが、而かも此の兩度の戰役に於て大捷を獲、尙ほ十年後の世界大戰に際しても措置宜しきを得たるが爲め、皇威惟れ加はり國光是に耀ぎて、歐米先進國と相伍するに至つたのであつて、此の如きは畢竟我武力の勝れてゐたことに歸屬しなければならぬ。語を換へて之を言へば、我國の今日ある全く武力の賚であつて、我國より武力を控除すれば、餘す所殆んど零なりといふを憚らぬ。世人は動もすれば所謂平和論者なる一派の僻論家に誤まられて軍備縮小とか軍備撤廢とかを云爲するけれども、此の事が

國の財力に及ぼす結果は別として、士氣に影響する所の至大なる、之を今日の情勢に鑑み、誰人か果して三十年前の日淸戰役二十年前の日露戰爭等に讓ること無しと斷言し得るであらう乎、吾人が特に之を說かずとも具眼の士は夙に知悉しあることゝ思ふ。

兩役竝に過般の大戰は叙上の如く既往に於て我國の進運を助長したこと絕大である。故に今後と雖も我國威を失墜せざらんが爲には、不幸にして他日何れの國を敵とすることゝなつても、必ずや此等戰役に於て發現したと同等の軍

人精神を發揮し、より以上に之を維持することを忘却してはならぬ。之を忘却することなからしめんが爲には須らくその精神の如何なるものであるやを傳ふべきであつて、歴史の尚ぶべき所以則ち此に存するのである。

吾人は乃ち此の見地に立ち、戰史を講ずるは勿論、思想上戰史以上に後進者を感奮せしむべき戰役關係の逸話を蒐集して之を一卷に纒め、世を益するの資となさんことを思立つてゐたのであるが、未だその機を獲るに至らなかつたのである。而かも幸にも本年九月十七日の黄海海戰記念日

をトし、有終會主催者となつて、日清戰役從軍諸將士の懷舊談話會を催したところ集まる者雲の如く、往事を追懷して談論盡くるを知らず、其の席に在りて筆記せるもの積んで此の一書を成すに至つた。そこで吾人は先づ之を手初めとして發行し、更に時を期して漏れたるものを蒐錄し、日露の役その他にも及ぼさんことを企圖してゐる。本書收むる所の不十分なるは固より認めて居るが、多少とも軍人精神の發揮に裨益するあらば、吾人の喜び何者か之に若かんやである。

大年十四年十二月

編者

戰袍餘薫

懷舊錄

第一輯

日清戰役之卷

挨拶

會長　寺垣猪三

諸君、私は司會者と致しまして、本日懷舊談話會を催しましたことに就きまして、一言御挨拶を申上げます。

明治二十七八年戰役以來既に三十年を經まして、彼處に人名表を掲げてありますが（卷尾に附す）、段々赤い標が附くやうになりました。就きましては洵に僅な時間ではありますが、非常なる御功績に就て、戰史に掲げられた以外で、何等か將來の參考になる事を御話

を願ひたいと思ひまして、此の會を催した次第であります。

御話は筆記は致しますが、「有終」には掲げませむで、別に小冊子として、部内の要望者に配付する積りであります。從つて有終會に於て御話を充分調べまして、失禮ではありますが、事柄に依つては除くことがあるかも知れぬと思ひます。是は豫め御許しを願つて置きます。實は御話し下さる方が大分多いので、洵に時間が少く遺憾に存じますが、約十分間で御話を願ひたいと存じます。それで藤田幹事より御話下さる方の名前を申上げますから、其の節は其の場所或は演壇に御進み下さる樣御願ひ致します。尙失禮ながら前に御居での方は大分御耳が遠いやうに思ひます。それで餘り遠くで御話し下さいますと、此方の方には聞えないと思ひますので、其の邊御含みの上、充分に聞えるやうに御話を願ひます。又名簿を出してありますから、それに當時の官職と姓名竝に現時の年齢の御記入を願ひます。それでは是より御話を願ふことにしまして、御名前を申上げます。

豐島の役

（明治二十七年七月二十五日）

開戰前後の實況

（常備艦隊參謀海軍大尉）
海軍中將　釜屋忠道

日清戰爭は七月二十五日の豐島の海戰を始めとして九月十七日の黃海の戰、續いて旅順の陷落、其の翌年二月十一日丁汝昌艦隊の全滅、威海衞の降伏となり、轉じて澎湖島の攻略から臺灣の占領、是が丁度明治二十八年の秋十月頃迄かゝつて居ります。私は開戰前より常備艦隊の參謀を致して居りまして、何れの海戰にも參加しなかつたことはなかつたのであります。又其の當時の僞らざる日記を有つて居りますが、斯る老大なる事柄を僅に十分や十五分で申上げることは全く不可能でありまして、黃海の海戰のみでも二時間や三時

間を要すると思ひます。縱令戰史にないやうな事柄としても、是れ以てむづかしいと思ひます。併しその梗概を申上げることに致します。

舊い方は日清戰爭は如何にして起つたかは、掌を返すが如くに明かに御承知でありますが、若い方は當時御產れになつた方もありませうし、又丁度小學校や中學校時代であつた方もありませう。從つて日清戰爭は何の爲めに起つたかを御承知のない方もあらうと思ひます。

當時の常備艦隊は松島を旗艦として千代田、高雄、浪速、それに嚴島（汽罐修理の爲め行動を共にせず）等でありましたが、其の年の四月出港し、臺灣を視察して福州に行つたのが五月の末、六月の初旬でありました。所が松島は閩江を溯りませむで馬祖島に碇泊し、千代田、高雄の二艦が溯つて馬尾に碇泊したのであります。其れより私共視察員が福州城內へ出かけました所が、其の夜直に歸艦すべしとの電報が來まして、夜中大雨を冒して歸りました。高雄に海軍省より『朝鮮東學黨穩かならず至急釜山へ廻航せよと司令長官に傳

へよ』といふ電報が來ました。是が當備艦隊に來た抑も最初の電報であります。千代田と高雄は直に至急點火をいたし、翌朝閩江を下つて馬祖島に到りました。私共は松島に歸り、司令長官に斯ういふ電報が來ました、直に釜山に廻航せよといふことでありますと報告し、恐らく釜山の我が居留民は朝鮮の人民に蹂躙せられて、哀れな姿を止めて居るとであらうなどと想像し、司令長官は『各艦至急點火隨意に釜山に廻航せよ』といふ命令を出されました。と言ふのは、松島、千代田、高雄は各速力が違つて居りますし、或はエヤーポンプに故障があつたり、機械が充分廻轉しないといふやうな故障があつたから、一艦でも早く釜山に行つて、我が居留民を保護しようといふ考で、途中陸戰隊を立て付けて、釜山に到着したら、斯く〳〵の順序に依つて、陸戰隊を上陸せしめようといふ計畫をして、釜山に向つて急ぎました。所が愈〻釜山の港外に來て見ると、我が領事館のマストに、日章旗が高く翩々として翻つて居る。之を見て先づ居留民は大丈夫、蹂躙せられて居らないと安心しました。さうして釜山領事館留め置きにて、本省から我艦隊宛九通の電報が着いて居りま

した。それは内外の情勢に關する事、軍艦の行動に關する事、糧食、石炭に關する事等でありましたが、續いて六通の電文が到達しまして、大鳥公使が八重山に乘つて仁川に向はれるから、之を援護せよといふやうなとでありました。そこで高雄は廣島師團の一部である第五混成旅團の乘つて居る和歌浦丸を援護する爲めに下關に廻航し、千代田、松島は仁川に廻航しました。途中色々の話もありますが、到底詳細に述べられませぬ。仁川に到着すると、大鳥公使の乘つた八重山が少し遲れて着きましたので、直に陸戰隊を上陸せしめ、八重山にも七十名の陸戰隊が乘つて居りましたので、之と合して合計四百八十八名の陸戰隊員が風雨泥濘を冒し、途中で倒れた者もありましたが、大鳥公使を護衛して兎に角京城に入りまして、要所々々を固めて、我が公使館を衞つたのであります、と言ふのは、支那は其の前に牙山に兵を送つて、京城に屯在する我が陸軍を打拂ふといふ形勢が見えたからであります。之が六月九日でありまして、同十二日には混成旅團が着きましたので、陸戰隊と交代したのであります。其の當時支那の軍艦はどうかと云ふと、仁川には多數碇泊し

て居りまして、平常の如く訪問もし、互に交際をして居りましたが、併し互に戰意を決して居る形勢があつて、或は水雷其の外で、我が軍艦を攻擊しやしないかといふ虞がありましたので、充分警戒して居つたのであります。

斯くて仁川に滯在すると六月初めより同月の二十日迄、此の間絶えず支那兵の行動に注意して居りまして、外交上の談判に就ては、此の席に御居での先輩山本大將閣下は詳しく御承知のとでありますが、艦隊に於て想像する所に依りますと、形勢愈々迫つて來ました我が常備艦隊は八重山、武藏、大島を仁川に殘して、其の他は全部佐世保に引上げよといふ電命が來ました。艦隊が佐世保に引上げたのが丁度六月二十四日で、それより常備艦隊は新に艦隊條例の發布があつて勢力を增し、又七月中旬には新に警備艦隊が出來て、相浦中將が司令長官となり、同時に幕僚も任命せられました（後に西海艦隊と改めらる）。又それ迄は常備艦隊には參謀が一人傳令使が一人と秘書が一人、卽ち將校幕僚としては、故島村元帥と私丈でありました。併し愈々開戰となつて、斯る少數の幕僚では晝夜の劇務に

堪へず、如何とも仕方がないので、本省に於ても其の準備に着手されまして、常備艦隊に參謀長を設け、司令官を置き、それに參謀數名を附け、其の外艦隊航海長、艦隊軍醫長、艦隊機關長等を設けて、夫れ〴〵機關が整つたのであります。

當時佐世保に集合した軍艦は幾十隻といふ數でありましたが、悲しい事には當時は信號の何たるを知らない――と言つては少し過言でありますが、全く艦隊運動に就て熟練した將校が極めて少くて、信號しても艦隊の整備は洵に遲々たるもので、今日から考へますと殆ど成つて居らないのであります。是に於て艦隊司令長官は非常に心配されまして、此の不熟練なる艦隊では、正々堂々と一擧一動信號の下に行動するとは困難であるといふ考から、毎日暇ある毎に佐世保港外に出動して艦隊運動を行ひ、其の能きない日は各艦より小蒸氣を集めて艇隊運動を行ひ、其の缺點を補ふことに努力されたのであります。所が茲に一つ緊要な問題がある、それは今日でこそ何でもない事でありますが、其の當時としては、如何なる陣形が最も有利であるかといふ問題であります。是は曾て經驗のない事ありま

すから、或は單横陣が可いとか、或は群隊陣形が可いとか、或は小隊縱陣とか、或は單縱陣が可いとか、色々の說がありましたが、甲乙兩隊に分けて對抗運動を行ひ、戰爭の眞似をやつて見た結果は、巧みな事をやつた艦隊は何時でも負け、それに反して何でも彼でも單縱陣で、「先頭艦の後を續け」で、グル〴〵廻はつて、信號なしでも行動する陣形が勝を制するとが確實に判つたので、今度の戰爭は單縱陣といふとに決せられたのであります。

斯くてある中に形勢は漸く切迫して來まして、それ迄軍令部長は中牟田中將でありましたが、七月十八日か十九日かに樺山中將が軍令部長に任命されました。さうして同軍令部長は高砂丸に乘つて、同月二十日に横濱を出發、二十二日に佐世保に到着されました。到着されると、高砂丸に司令長官、司令官、參謀長以下を集めて、大本營の決心を示されました。當時大本營の戰策としては三ケ條の場合を想定したものでありまして、第一は我が艦隊が大勝利を得たる時、第二は我が艦隊が敵艦隊と遭遇して、互に勝敗未決の時、第三は我が艦隊が大敗の已むなきに至つた時、此の三ケ條でありまして、第一に我が艦隊が大

勝利を得た時は我が陸軍は長驅北京迄突入すること、第二勝敗相半ばした時は、已むを得ず我陸軍は平壤に立籠り、艦隊は朝鮮海峽に行動して、敵の艦隊を飽迄も阻止し、陸軍の輸送を續けて冬越しをすること、第三我が艦隊が全敗せしときは、我陸軍は全く朝鮮を引上げ、我が艦隊は沿岸を固く守るといふのでありました。是に於て大本營の決心も既に開戰にあるとが明瞭になりましたので、艦隊の士氣は一層勃興したのであります。

其の前夜即ち七月二十一日の夜、佐世保海兵團に於て盛なる訣別の宴が開かれまして、意氣天を衝くの概がありました。其の翌二十三日午前九時、艦隊は威風堂々と勢揃を爲し、高砂丸は軍令部長を乘せて港外に出で、艦隊は佐世保の軍樂隊及び地方の人々に見送られて出港しました。港外に出ると軍令部長が高砂丸より『我が艦隊名譽を上げよ』と信號されましたが、是に對して浪速、秋津洲は『誓つて揚ぐ』と信號し、吉野は『全うす』と答へて目的地に向つたのであります。

是れより本隊及其の他の諸艦船は朝鮮群山沖の淺水灣外に廻航して同地を假根據地となし、第一遊擊隊は牙山を偵察する任務を與へられ、又前に仁川に殘して置いた八重山、武藏、大島の三艦にはベーカー島に出て居る樣に電報されてあつたのでありますが、第一遊擊隊が二十五日の未明ベーカー島に到着したところ三艦の影は更に見えない。そこで司令官は幕僚に對して、どうするかと問はれましたが、ベーカーと云ふ島の名は豐島の附近にもモ一つありますから、三艦はそれと間違て居るかも知れず、兎に角其處迄行て見て、もし其處にも見えなかつたら、牙山、仁川と偵察を遂げ、其の結果を司令長官に報告しなければならぬといふことになつて、彌々豐島の方に進みましたが、遙に淡靄の中の前方に大きく煙を吐いて、堂々南下して來る船がある。それが支那の軍艦か、或は他の國の船か、最初は不明でありましたが、近づくと支那軍艦であります。然るに玆に一つ訓令中に困つた點があるのであります。それは牙山を偵察して、若し敵艦隊が弱小であつたら戰爭するな、強かつたら打てといふのであります。併し強いか弱いかは戰爭をして見なければ判らない、是は甚だ困つたが、兎に角何でも彼でも打つて了はう、是れ即ち命令の本旨を遂行する所

以であると解釋したのであります。其の中に時々刻々接近して來る、水路は洵に狹い處に入りました。戰鬪の信號は已に〳〵綴らせて、信號兵の手に握らせてあります、敵は刻一刻と接近して來る。此の時吉野の航海長はあわたゞしく後艦橋に驅けて來て、こんな狹い處で戰爭されては、艦の操縱に困ると言ふ。なに、單縱陣でガツシリやつて了へば可いでないか。それでは困るといふので、司令官も其の意見を容れ、十六點の方向變換を行つたのであります。すると二番艦の秋津洲から――艦長は上村少佐後日の大將でありました――『何故返さるゝや』と信號して來た。唯『旗艦の通跡を進め』、是が即ち秋津洲に對する旗艦の信號でありました。それから引繰返して廣い處に來て、又十六點の針路變換を行つて戰鬪の信號をなし、直に戰鬪旗を檣頭高く翻へして進んだのであります。敵との距離は愈々近づいて、三千米の距離で砲戰が開始されたのでありますが、不幸にして此の時霧が掛り、それと本艦隊から打出す砲煙とで海上を蔽うて、後續艦の秋津洲、浪速も見えない。引返せば衝突の恐れがあるし、引返す譯に行かないので、暫くの間吉野は一直線に進みま

した。然るに後方に於て大きな砲聲が聞え、豆を炒るが如き機關銃の音がする。是は正さに浪速と濟遠が接觸したに相違ないと思はれたのであります。其の中霧も晴れまして、秋津洲も浪速も見えた。此處で又十六點方向變換をして敵艦を尋ねると、廣乙はチヤセリオ堆の上に乘り揚げ、火災を起して運動の自由を失ひ、濟遠は逃げつゝありました。所が茲に又一つの行違がある。浪速からの信號に依ると――當時の艦長は東鄕元帥閣下でありましたが――、『敵艦降伏如何にすべきや』といふことであります。茲に一言御斷り申して置きますが、艦隊の行動は各自の其の時の境遇と其の立場に依つて、觀察が非常に違ふのでありまして、私が觀察した所と他の方が觀察された所と、異つて居るとは勿論であります。それで浪速より今申上げた如き信號がありましたので、濟遠を見ますと、ズン〳〵逃げて行つて、吉野からは降伏したとは見えませぬでした。さて浪速の信號による敵艦降伏とは、今方に來つゝある敵の運送船の事ではないかと思はれたのであります。之れより先き二條の煤煙が見えたのでありまして、それは高陞號と操江であつたのでありますが、最

初何とも判らぬ中は司令官も是は敵の弱小艦隊を最初鼻先きに出して、強力な艦隊は後方に控へて居るのではないかとも思はれ、是はもう一度此處で戰鬪しなければならねと決心しましたが、近づいて見れば左にあらず、二隻の軍艦と見たのは支那の兵隊を輸送して來た高陞號と、今一隻は操江でありました。そこで司令官は降伏せる敵艦とは何か。イヤ、多分高陞號の事でございませう。併し軍艦と云ふではないか。イヤ、信號書には降伏せる敵船といふ事はありませぬが、敵艦は敵船にも意味が通ずるやうな譯でありませう。それではどうする。兎に角浪速艦長に高陞號の處分を御委せになつて、我が艦隊は逃げる濟遠を飽迄追擊して、之を擊滅するにありますと御答へしますと、それならさうしようといふことになつて、旗艦より浪速に向つて『其の艦は降伏せる敵船を率ゐて根據地に到り司令長官に報告せよ』といふ信號をしました。さうして吉野は濟遠を追擊しましたが、其の前に色々行違ひがあつて、秋津洲は自由行動を許した際に、列を脫して廣乙に向つたのであります。此の時廣乙はどうかと申しますと、遙か東の海岸に乘上げて、煙を吐いて居つて動

なけい、結局破壞したのでありますが、秋津洲はそれに向て砲擊して居りました。そして遠く隔つたので、遠距離信號を以て本隊に歸れと信號しましたが更に屆かない。已むなく吉野一艦を以て濟遠を追つたのであります。さう斯うする中に時間が經つて了つて、それから追擊して居る中に操江は逃れる丈けは逃げて見たものゝ、とう〳〵へこたれて、途中で蒸氣を吹いて止り、國旗を降して降伏の意を表したのであります。すると、吉野乘組の將校某がどうか操江を生捕らして呉れと言ふ。馬鹿言へ、今はあんな小さい降伏した軍艦に掛つて居る時でない、あんなものは後から拾つて行けば可い、大きな軍艦が逃げて行く、早くあれを追擊しなければならぬといふので、濟遠を追擊しました、其の時秋津洲が後方から來まして、操江を捕獲處分をしたのであります。大變長くなつて御迷惑を掛けましたが、詳しい事は三時間位を費さなければ申上げられませぬ。併し今日は是で御免を蒙ります。

浪速の行動

（浪速水雷長海軍大尉）
海軍少將　小花三吾

私は日清戰役の初めより終り迄、更に臺灣征討の大部分浪速の水雷長をして居りましたので、藤田幹事より今日何か話をせよといふとでございます。併し十分間といふとでありますから、さう長くは申上げませぬ。それに豐島の役となつて居りますから、豐島の役に就て少し申上げて見ようと思ひます。

水雷に就ては、黃海の戰、豐島の役には共に言ふべき事が別段ありませぬが、併し面白い事には日本の軍艦から魚形水雷を敵に向つて發射したのは豐島の海戰が最初であつたのであります。所がそれは失敗に終りました。併し其の失敗には理由がある。敢て水雷長として理窟を言ふ譯ではありませぬが、當時の魚形水雷の有效距離は僅に三百米で、四百米は

行かなかつたのであります。吉野の新式の水雷が四百五十米で、浪速のは三百米であります。從つて失敗は當然の事と思ひます。其の當時の浪速艦長が今の東郷元帥でありまして、今釜屋君からも御話がありましたが、高陞號の處分に就て、之を捕獲するか、或は打沈めるかの議論が餘程むづかしかつたのであります。其の事實に就ては、當時の東郷艦長或は有馬航海長が充分御承知でありますから私は申しませぬが、結局沈めるとになりました。そこで沈めるなら好いチヤンスでありますから、魚形水雷を打ちたいと申しますと、東郷艦長も之を許されましたので、早速水雷室に這入つて準備をして、上つて見ますと、どうもなか〳〵遠い。八百米から千米ある。短かく見ても七百米位ある。艦長に言ふと、イヤ戰術上是れより近づけるとは能きぬと言はれました。其の頃はまだ私も年齡三十になるからならんで、打てませぬから止めますといふのも殘念でありますから、進むだけ進む樣にして打てば、どうやら行くだらうと思つて打つたのであります。所が速力が無くなつて、途中でヘラ〳〵になつて、遂に失敗に終つたので、此の旨を艦長に報告すると、直に打方始

めの號令の下に、砲撃で沈めたのであります。此の三百米しか行かない者を七百米以上に打つたのは甚だ無謀な話でありますが、其の邊は御諒察を願ひたい。若い方も御居でありますが、是は後學の爲めに御承知を願ひます。もう一つ若い方で水雷長の職にある方もありませうから申上げて見ますと、今の水雷に就ては知りませぬが、其の時の水雷は例の舊いシユヴスコープの水雷でありますから、シンキング・バルブといふものがあつて、それにフツクが引掛からないやうにして浮くやうになつて居る。實戰の場合はシンキング・バルブにフツクを引掛け、浮室の中に水を入れて、沈めて了ふ裝置になつて居ります。私は其のシンキング・バルブの盤陀付を取つて、フツクが引掛つて沈むやうにして打つたから、確かに沈んで居ると思つたのであります。所が高陞號が沈んで、乘つて居つた支那の兵員とか、船長、機關長等が其の邊に漂流して居る。それを救助する爲めに艦長はカツター二隻を出した、其の艇長が歸つての報告に、水雷が浮いて居つたといふ。それはおかしな話だ浮いて居る譯がない、確かに沈んだ筈だと言つたが、確かに浮いて居るといふので、それ

では途中でヒヨロ〳〵して倒れたのであらう、惜しいから拾つて來ますと艦長に申すと、艦長が危險はないかと言はれたので、危險はありませぬと御答へして、直に現場に向つた。何しろ船が沈められたのでありますから、人がウヨ〳〵漂つて居りましたが、私はそれを助けるといふ餘裕はない、カツターに人の頭が當つたりしましたが、行つて見ると、水雷の上に一人馬乘りになつて居つた。棒を振り上げますと早速逃げましたので、其の水雷を抑へて、先端のピストルだけをすつかり脫づして、綱を附けて引張つて來ました。幸に一つの損失もなく濟みましたが、確かに沈む筈の水雷が沈まない。おかしいと思つて、外の水雷も皆盤陀を取つて、シンキング・バルブにフツクが掛るか掛らないかを試驗した所が、四門の水雷發射管で一門に三發、即ち十二發であるが、其の中引掛つたのが一つか二つで、其の外は全部掛らない。是は以ての外の事と思つて、早速艦長に報告し、艦長から艦隊司令長官に報告して、各艦でも矢張り試驗をした筈でありますが、他の艦の事は存じませぬ。斯ういふ風でありますから、何時もシンキング・バルブに掛るものと思つて居ると、大變

な間違であります。固より今の水雷はどうなつて居るか存じませぬが、若しさういふ裝置なれば、それだけの手段を取るEが必要と思ひます。尙私は其の外威海衞の防材破壞にも從事し、下つて臺灣で地雷の發火も行ひました。それは此の席に居られる山屋大將が當時高千穗の水雷長をして居られて、私と二人でやつたのでありますが、それは實に壯快なものでありました。まだ面白い話がありますが、それは他日に讓つて、今日は是だけに止めて置きます。

通信船より見たる豐島沖の海戰と其の前後

（運送船監督海軍少尉）
海軍少將　近藤常松

私は日淸戰爭中は終始陸軍の運送船に乘つて居たのでありますが、明治二十七年五月頃より東學黨の問題も大分面倒になつた模樣で、當時私は廣瀨武夫君などゝ共に長浦繫留の迅鯨（水雷術練習所）に分隊士として勤務致して居ました。すると或日海軍省より（海軍省は今の虎の門外東伏見宮御邸の處）至急上京すべき旨の急電に接しましたから「そら行くんだぞ」と云ふので大急ぎて行李を整へ、翌早朝小蒸氣で横須賀に出て上京海軍省に參りますと、可成早く幸便を求めて、仁川在泊の木曾川丸に乘組み、監督將校たるべしとの訓

命を戴きましたので、すぐ其の足で廣島へ參つたのであります。當時汽車は尾ノ道まで開通して居ましたが、同處より廣島迄は試運轉も終り、不日一般に運轉開始といふ時でありました。廣島に於ては松本和少佐の御指圖で、吳海兵團より信號兵一名と信號器具小銃二挺を受取り、大島旅團を輸送する運送船中の熊本丸に便乘して仁川に參り、同地で木曾川丸に乘組んだのであります。木曾川丸の任務は、當時京城釜山間の電信が切斷され、大切な時機に於て京城と東京との通信が能きなくなつたので、陸軍では木曾川丸と富士川丸といふ僅か二百噸ばかりのちつぽけな船を傭上げて通信船に充て、交互に仁川釜山間を往復せしめられたのであります。斯樣な次第で、當時內地に居りました私共と海軍大學校の學生諸君とが監督將校として、眞先きに國外へ飛び出したのであります。

私は木曾川丸で丁度豐島海戰當日、浪速が高陞號を擊沈した現場を見たのでありますから、其の海戰當時に於ける仁川の一般狀況とでも申す樣な事を申上げて見ようと思ひます。それも時間がないとで御座いますから、かい摘んで申上げて見ようと思ひます。

私は木曾川丸に乘船以來十數度仁川釜山間を往復したる後、更に七月二十三日夕釜山を出發して仁川に向はんとする際、兵站司令官武內陸軍大佐より私へ特に一通の書類を渡され、之は最も大切な書類であるから、仁川到着の上は速に仁川の兵站司令官に手渡しせよとのことでした。內容は大島混成旅團長への訓令で、其の大意は我海軍も愈々佐世保を出發し黃海に向ふこととなつたから、お前は眼前の敵卽ち牙山の支那兵を擊ち攘へといふ意味と承知しました。私はそれを聞いて、愈々始まるなと思ひ乍ら釜山を出發したので御座います。翌二十四日の朝長直路に差懸りますと、吉野、浪速、秋津洲等が長直路を偵察せんとするのに出遭ひ、遙か沖を見ますと、所安島沖に佐世保を出發した我本隊の松島、嚴島等が堂々竝んで朝鮮海に向つて進んで行くのでした。これを望見した私は何とも形容の能きない勇ましさを感じました。斯くて私の船が仁川に入つたのが二十五日の午前六時頃と記憶して居ります。仁川には八重山、大島、武藏の外、英米佛等の外國軍艦が居りましたが、急いで上陸して陸軍の兵站部に行つて、電報等の入つて居る重要書類を手渡しました。是れ

で其の時の私の役目も濟みましたから、當時海軍士官が常宿として居つた大草といふ下宿に行きまして、當時の皆さんが御存知の評判娘のお梅と申す者に食事を持つて來るやう命じて、其の間に其の頃仁川で發行して居つた小さな新聞で、朝鮮新報といふのを寢轉んで讀んで居る中に食事が出來たので飯を食ひ、それから少し經つて八時頃かと思ひますが、遙か沖に轟々と砲聲が聞えました。風雲急を告げ、何時戰爭が開始されるか判らない際でありましたから、其の砲聲を聞いて私は愈々戰爭が始つたのだと直感しました。そして仁川の居留民――當時支那人も澤山居りましたが――は非常に騷いで、唯もう戰々兢々の有樣でありました。私の船も何かの場合には沖に出るとがないとも限らない、蒸氣を上げて待つて居ようと考へたので、大草を出て兵站部に行つて、『今の砲聲は沖で始まつたに相違ない。自分は何時でも出られるやうにして置くから、用があつたら言つて呉れ』と申して、船に歸つて至急點火を命じました。すると仁川に碇泊して居つた八重山、大島、武藏等は錨を揚げ、武藏はマスト、ヤードを飾し、合戰準備をなしつゝ遽しく沖に向つて出て行きました。後で聞くと、大島は石炭を積む爲めに其の前日か或は其の朝早く入つて來て、月尾島の海軍石炭庫に上等機關兵曹と兵員二三名ばかりを派出して、其の準備をさして居つた處へ砲聲が聞えたので、それ等の者を置去りにして出て行つたといふ話でした。

私は唯船にぼんやりして居ても仕方がない、沖の方から入つて來る船はなし、沖の樣子はちつとも判らないから、一つ出て行つて樣子を見て來ようと思ひまして、再び兵站部に行つて、『どうもぼんやりして居ても仕方がないから、沖に行つて模樣を見て來たいと思ふが、船を出しても宜いか』と言ふと、『それでは行つて見て來て呉れ』といふことでありましたので、更に仁川に居られた軍令部の安原少佐にも其の旨を話しますと、同少佐より伊東司令長官に宛てた一通の書面を託され、『若し沖に於て我軍艦に會ふことがあつたら、どの艦でも可いから之を渡して、長官へ屆ける樣に依頼せよ』とのことでした。又前に大島に置去りにされた兵員も私の船に迎付いて居りましたから、是等を乘せて、午前十時頃錨を拔いて沖に向ひました。さうしてラウンド・アイランドを越え、立標のあるホワイト・ロックに

差懸り、遙かに牙山の方を見ますと、黑煙を棚引かして此方へ向つて來る船が居ります。之が淸國軍艦であつては敵はぬと思ひましたから、引返して靈興島の蔭に隱れて見て居ると、それは武藏が牙山を偵察して歸る途中でした。味方の船なら安心だといふので、更にホワイト・ロックを越えて西に向ひました。此の日は海上が非常に穩かで宛ながら鏡の如く、遙かに八重山と大島が煙を吐いて西に向つて進むのが見え、今亦武藏も近くに同方向に進行してゐるのですから、恐いものは何もない。本船もズン〳〵跡について進んで行つて、ベーカー島に並んだ頃、午後一時頃と記憶しますが（ベーカーと稱する島は內と外とに在り、今申すベーカーは內側のものであります）、遙かの西に當つて砲聲が數回聞えました。是れは八重山から發砲したのでもなく、又大島、武藏より發砲したのでもなく、眼界にあるものは右の三艦以外にはない、して見れば或は何れかの島蔭で再び始まつたのではないかと思つてゐると、同時に八重山も武藏も一齊に今までの針路を變じて北方に艦首を向けました。双眼鏡で尙能く共の方面を見ますと、遙か彼方に船が二隻見え出した。共の

一方は浪速か高千穗らしいが、他方のものは商船型であることを知りました。さうして居る中に商船型の船が段々低くなつて來る。船なら近づくに從つて高くはつきり見えなければならぬのに、段々低くなり、尙も能く見てゐますと遂に船體が無くなり、マストのみが二本見えるやうになりました。之は不思議だ、或は先刻の砲聲は此の船がやられたのではないかと思ひ、段々近づくと、一方は浪速であることが判りました。兎に角味方の艦ばかりであるから、共處迄行けば何か判るだらうと存じまして、本船は進行を續けましたが、近づくに從ひ、そこらあたり一面に何だか浮いてゐるものがあります。固より人間が浮いて居るとは氣付く譯はありませんが、やがて共れは皆支那兵であることが判りました。天氣が平穩で波が無いから、恰も大きな池に西瓜を無數に浮かしたやうでありました。又リギンには黑山のやうに兵隊が登りつめて居る。共の兵隊は何れも支那の陸兵でありましたから、先刻の砲聲は此の支那の運送船を打つたのだなと初めて知つたやうな譯であります。さうして浪速の廻りに八重山、大島、武藏も集つて居りましたから、私の船に便乘して來

ました大島の兵員と共にボートで大島に行き、艦長迎少佐に事實を伺ひますと、『イヤ實は今此處に來たばかりで、何が何だか判らない』といふことでした。私は安原少佐より依託された書類を艦長に御渡し、兵員を返して自分の船に歸り、手旗で浪速に様子を伺ひますと、今朝豐島沖で清國艦隊に出會して之を撃破し、今又清國運送船を撃沈したところだと云ふことでありました。其の間に時刻も段々經過して、最早午後四時過ぎにもなり、さうグズ〳〵して居る譯にもいかないので、本船は歸途に就いて、飛魚水道を通過して仁川に歸りましたのは、もう日沒も過ぎて薄暗くなりかゝつた時でありました。所が先にも申しました如く、仁川には外國軍艦も在泊し、當時英國は支那最貧でもあり、私の船が仁川に入れば、必ずや英艦等より何か聞きに來るであらうが、見たまゝ聞いたまゝを話して可いやら惡いやら、少尉の若輩で判斷が付き兼ねましたから、面倒を避ける爲め、投錨と同時に急いでボートに飛乘り、波止場に向ひました。又船長には外國軍艦などから聞きに來たら、何も知らないと言へと命じて置きました。

仁川では今朝の騒ぎ以來何等の通信にも接せず、船も入らず、どうなつたか少しも判らないといふので、市民は非常に心配してゐました。波止場には支那人日本人とそれに多少の西洋人も混り、一杯黒山のやうに集つて、私の船の便りを待つて居ました。當時釜山の總領事でありました室田義文君も仁川に來て居られ、陸軍の小蒸氣で兵站部役員と安原少佐と共に私を途中で迎へられましたから、ボートを途中で乘捨てゝ波止場に上りますと、共處に集つてゐた日本人や支那人が身動きもならぬ程に私を取卷いて、『沖の模様を一言でも可いから聞かして呉れ、愈々戰さになつたのか、日本が勝つたか負けたか言つて呉れ』と申して聽きませんから、『戰は始まつた。日本の軍艦は支那の軍艦を追拂ひ、おまけに支那の運送船を撃ち沈めて、多數の支那兵が死んだ』と申すと、日本の居留民は非常に喜んで、『ワーワッ』と言つて引揚げました。それに引換へ支那人が悄然として引揚げて行つたのは聊か氣の毒の感で御座いました。それから私は總領事等の一行と共に領事館に參り、海圖に就て今朝來の經過と見た事聽いた事を委細報告致したのであります。尚其の後の事に就

て申上たい事も澤山ありますが、時間が非常に遲くなりましたから是で御免を蒙ります。

編者曰、左記は近藤氏が當日右に續いて御話さるゝ心算なりしも、時間の遲るゝを顧慮し省略されたるものゝ由にて、態々原稿を御送付になりし故、續いて玆に掲ぐることゝせり。

翌二十六日になりますと、兵站部より來て吳れとのことで、早速參りますと、愈々開戰となり、大島旅團は牙山の敵を討伐する爲め、其の先發隊は旣に出發した。其れや此れやで大鳥公使より緊急報告すべき政府宛の書類があるといふことだし、又京城の陸軍司令部よりも、大本營宛大至急の報告書類があるから、其等の書類が到着次第、直ぐに仁川を出發し、釜山に行けとのことでしたから、私は直ぐに船へ歸り、出船準備を命じますと、玆に厄介な問題が起りました。それは外でもない乘組船員が昨日高陞號の撃沈されるのを面のあた

り見たので、一朝地を換へ、若しも外海に於て淸艦に出會すれば、高陞號の二の舞となり、ひどい目に逢はねばならぬから、大丈夫安全といふ迄出帆するのはいやだといふのでありますから、私も當惑致しましたが、開戰早々の此の大切なる時機に於て、通信船たる任務に省み、彼等の言ふことを採り上げる事は能きない。さればと言つて、若しや外海に於て偶然淸艦に出會せんとも限らない。萬一さういふ場合になつたら、此の微弱な商船は忽ち捕獲の浮目を見るか、或は亂暴なる淸艦の事故何んな酷い目に逢はされるかも知れない。船内には武器と言つては小銃二挺あるのみで、どうする事も能きない。此の使命を果すには、危險區域を夜間に通過し、夜が明けたら可成朝鮮西岸に接近して木浦水道に入り、そこから釜山に向ふに如かずと決心して、船長にも其の旨を言ひ含め、さて總乘組員を集めて、時機の甚だ大切なることを說き、危險區域は夜中燈火を消滅して航海すれば決して見付かる事はないし、又今夜此處を出なければ、戰爭の成行に依つては、何時此處を出られるか

も判かず、乘組全員の安全を計るにも、今夜此處を遁れ出して釜山に行くに如かず、此の場合日本男子として多少の危險を冒すのは當り前の事である。一同考へを飜して大いに働いて貰ひたいと說き聞かせ、尙本船は陸軍の御用船となつたのだから、乘組員は總て軍人同樣である、戰時に當り軍人が命令を拒むと軍法によつて銃殺されると威しましたが、さすがに彼等も納得致しましたから、先づ是れで安心と早速兵站部に行つて、緊急重要書類の到達を待つてゐました。其の間に木曾川丸の釜山行を領事館、郵便局其の他重なる住民に通知し、午後五時頃京城よりの書類も到着致しましたから、直ちに本船へ歸り、午後六時過ぎ仁川を出發し、死物狂ひの速力——と申した所で十二海里許りの速力——で進航し、燈火を悉く隱滅して最大の警戒をなしつゝ、外のベーカーを二十七日午前一時頃通過しましたが、何等の事故もなく危險區域と思ふ場所を通り拔け、一と先づ安心致しました。さうして午前十時頃木浦沖に差懸りますと、遙か先方に我水雷艇隊の北上するのに出會ひましたから、艇隊はまだ開戰の事を知らずに居るだらうと思ひまして、直ちに信號で艇隊の停止を

乞ひ、ボートを卸して手近の水雷艇に漕付けると、之は土屋光金君を艇長として頂く十二號艇でしたから、二十五日の開戰の事共の他見聞の事共を御咄して、『御氣を付けなさい』と申して引返しました。後で土屋君から承りましたら、同艇隊——餅原少佐の艇隊——では私の噺によつて始めて開戰を知り、直に十四吋の赤水雷を引出し、空氣を裝塡するやら大騒ぎをしたと云ふことでありました。次で筑後川丸——測量船——にも出會ひましたから、同じく開戰の事を通知し、翌二十八日早朝釜山に到着して、日清戰爭開始、高陞號擊沈の模樣竝に當日京城附近の情勢を傳へたのであります。

黄海の役（明治二十七年九月十七日）

橋立の行動

（橋立航海長海軍大尉）
海軍中將　江口鱗六

私は黄海々戰の時は橋立の航海長をして居りましたが、當時の艦長日高閣下より何か御話があることと思つて、何も考へて來ませぬでしたが、唯今幹事の方より突然話せとのことでありましたから、記憶のまゝを簡單に申上げる積りです。

橋立は本隊の三番艦でありましたが、九月十七日は非常に好い天氣で、充分遠望もきゝました。それで最初見た敵の陣形を色々と觀察しましたが、要するに横陣或は凸梯陣であつて、單縱陣でないことだけは判つた。第一遊擊隊の高千穗が六千米位で第一に打出したの

です。是に就ては、高千穗は慥か布哇から歸つたばかりで、威海衛の偵察砲擊にも加はらなかつたので、打ちたくてたまらず、一番早く打つたなと話をして居つたのであります。是より先き威海衛の强行偵察の時、それ迄は長直路に長く入つて居つて、何れも汚ない夏服を着て居りましたが、砲擊の其の日には瀨ノ口君初めとつておきの綺麗な着物を着て來た。是は死に際を飾らうといふ考であつたと思ひます。九月十七日にも大概の人は一枚びらに着替へました。暫くすると何時のまに來たのか判らないが、丁度橋立の砲塔の上邊と上の被ひになつて居る旋回部との間に六吋位の敵彈が命中炸裂して、それが跳ねて砲塔の天井に中り、更にそれが跳ねて、砲術長の瀨ノ口君、砲塔長高橋君の頭に拇指大の鐵の斷片が入つて致命傷を與へた。餘り近距離戰にならない前に、橋立の三十二サンチ砲は三發か四發目に故障が起つて打てなくなつた。カンニングタワーに居つて、右の彈丸の破片が來た時、硝子が破れたのは氣が付いたが、其の後少しも打出さない。どうしたのかと思つて、カンニングタワーから砲塔をのぞき見れども判りません。其の中に二等水兵の早川が私の

所に來て、砲術長も先任分隊長も相重つて仆れ、砲塔長も腰掛臺から落ちて、一時氣絶したといふことでありましたから、已むを得ず私が其の砲塔を指揮することになつたのであります。それで第一遊擊隊の吉野外三艦が行つて、揚威、超勇を擊沈し、續いて致遠もやられて船腹を露はし、其處に四五人の者が乘つて居つて、近くを通つたので、其の中の一人が支那流の敬禮をして居る。是は救助して呉れといふ意味であつたと思ひますが、其の中に賄で豫て牛殺しの名人と言はれた某は友達の銃を無理に取つて、三十二サンチの横に隱れて居る。何をして居るかと言ひますと、エヱと言ひつゝ逃げて行きましたが、彼は『あれは日本軍人の打出す彈丸で死にたいので、それを有難がつて御辭儀をして居るのだ』と言つて居りました。斯くして居る間に比叡と扶桑が大分隔つた。それは何でも比叡が來遠と定遠の間に突貫したのだと言はれましたが、兎に角恰も遮斷されたやうな形になつて、ずつと離れて了つたのです。それから松島、千代田、橋立、嚴島の四隻が旗艦の通跡を進み、比叡と扶桑は餘程遲れましたが、其の中に敵の陣形は全然亂れ、逃げるものは逃げて、丁

度三時半頃と思ひますが、殆ど指揮が能きないやうに見えました。唯定鎭二艦が依然として居りましたが、定遠は大火災で、鎭遠が援護して居つたのです。前に腰掛臺から落ちた砲塔長も快くなり、隨分長時間を費して、井上掌砲長が必死となつて砲の修理をして、やつと出來たので、今度一發打つたら、又打てなくなるかも知れぬといふ處がありますから、是非二千米位迄近寄つて打ちたい、必ず命中させると申しました。其の中に各艦自由運動で、所謂不管旗が揚りました。そこで艦長に『二千米迄進んで、必ず打ち貫くと申して居りますが宜しうございますか』と申上げると、日高艦長も宜しいと御許しになりましたので、直に面楫に取り、約五六百米ばかり進んだ時に、此方の速力が早くて、定遠、鎭遠の速力が出なかつたと見えて、四番艦の嚴島と敵との間に挾まるやうな形になつて、同艦の射線を遮るゆゑ、之を避けんため半速にして居りますと、艦長は『後からどの艦も來ぬではないか』、『嚴島は全く來ませぬ』、『それはいかんね、それでは止めよう』といふ御言葉でありました。之を後に至つて考へますれば、あれだけ叩き付けて、何も其の時突進しなくて

も可かつたのですが、其の時は熱心に進んで行きたかつたのであります。固より水雷も前の御方の御話の通りの近距離でなければ利きませぬので、已むを得ず又松島の方に向つて行きました。千代田の航海長は石井君でありましたが、後日私との話に『不管旗が二度揚つたのに、何故松島の跡を付けたのか』、『イヤ、初めからの約束で、對艦組織であるから、松島の跡に付かなければならぬと思つて、行きたかつたが行かなかつた』と申されましたが、後に旗艦が橋立に移つた時に、幕僚の話に依れば、矢張り各自に攻撃を行つても可いといふ考であつたそうで、橋立が敵に向つて突進したのは、司令長官の意思に合して居つたといふことでありました。併し單獨で續くものなく、遂に彼の如く段々敵の距離が遠くなり、日が暮れた次第です。其の當時は今日とは違つて、遠距離射擊でなかつたから、無駄彈丸を打つことは可くないと皆考へて居つたのでありますが、後に聽きますと、三十二サンチの佛蘭西のカネー砲は四發か五發で皆故障を起して居つたさうであります。定鎮の巨砲も同樣であつたと思はれます。我三艦の大砲はベルタンに依つて、定遠、鎮遠の甲鐵を貫く

趣意でデザインされたと聞いて居りますが、當時議會は製艦費を出さないので、甲鐵戰艦も造れず、當局の苦心の末、出來たのでありましたが、今申す次第で其の實現を見るに至らなかつたのであります。併し天祐と御稜威とに依り大勝利を占めたといふに止まり、別に是と言つて御話しするやうな記憶もありません。以上日高閣下の御話がなかつたので、私がつまらぬ事を雜談的に申上げ、恐れ入る次第であります。

赤城の行動

（赤城航海長海軍大尉）
海軍中將　佐藤鐵太郎

私にも何か話をせよといふことでありますが、赤城の事に就ては殆ど戰史に揭げられて、吉川君の如き面白い話（編者曰く、後章「威海衛の役其の他」に出づ）もありませぬ。其の前に申上げて置きたい事は、黃海の戰爭に就て、心なき人は妙な事を申します。私が大學校に居る時にも、さういふ事を聽きましたが、あの時本隊は何等顯著なる實績を擧げて居らぬと言ふ人があります、是は洵に間違つたことと思ひます。吾々の敵は定遠、鎭遠でありまして、之れと最初から取組んで鬪つたものは本隊であつて、本隊が最初から終り迄鬪つたからこそ、第一遊擊隊にしても、眇乎たる赤城にしても、若干の功を立てることが能きましたので、之を忘れてはならぬと思ひます。大局に於て本隊が最も强い定遠、鎭遠と取組んで放さなかつたといふことは、黃海の海戰に於ける最も注目すべき點と思ひます。是は餘事ではありますが、若い將校方に特に申上げて置きます。

次に私の失策話を申しますが、少し如何と考へる事もありますから、それを申上げて見ませう。愈々戰爭となりますと、赤城なぞはどの艦にも敵はないやうに見える。艦長は丁度私と並んでブリッヂにあつて、『どうも皆大きいな』と言はれて居つたが、どれも皆大きい。『どうも向ふ艦がないやうでありますが、其の中にはどうかなりませう』と話をして居ります中に、來遠が赤城を距ること八百米位の所に來た時、艦長が『來遠のブリッヂには人が一人も居らぬでないか、併し此方の大砲では沈めることが能きないが、どうしたのだらう』と言つて居られましたが、私はそれに對しては答へなかつたのであります。何故ならば來遠は正に八百米に近づいて居りますが、どういふ運動になるかが、非常に氣に掛つて居つたからであります。其の中にどうしても來遠と衝突しなければならぬ。自分の艦で來遠を衝け

ば、目出度いことは目出度いが、どうも何となく氣味が悪い。そこで艦長に『衝かれさうでありますから、取り舵を取りませう』と申上げて、直ぐ『取り舵』と按針手に命じましたが、好い工合に舵が利きまして、ぐつと廻はつて斯ういふ形になつたけれども、此の際下から應答をしない。さうして何とも言へない様ないやな聲が聞えた。是は舵取りがやられたなと思つて、もう一度『取り舵』と言つたが矢張返事がない。此の時ちよつと見ますと、もう大抵可ささうでありましたから、艦長を顧る暇もなく、『宜候』と命じました。其の時はもう他を顧る暇がなかつたのであります。すると私の脇に立つて居つた村田少主計が私の背を叩いて、艦長が〳〵と言ふ。それは丁度戰が始まつて八分か九分經た時であつたが、見ると艦長が仰になつて仆れて居る、其の外兵員も仆れ、信號兵も仆れて居る。又佐々木大尉の怪我をしたことは知つて居りますので、療治にでも行つたかと思つて居ると、矢張り其處に仆れて居る。此の光景を見て實に悲壯な感に打たれたのであります。それで佐々木大尉に、『一番分隊長、艦長が仆れたから、おやんなさい』と言ふと、大尉の傷は甚しくもなか

つたが、負傷の場所が悪かつたと見えて、氣が少し遠くなつて居りまして、低聲に『航海長、頼む〳〵』と言ふので、『それなら私が致します』と言つて致しましたが、此の時は彌ゝ自分かと思ふ様な、そうして一種愉快のやうな、併し何ともいへない悲痛に堪へぬ様な妙な心持が致しました。斯くして四五十分の間敵の三艦に追ひ廻はされて、可なり苦みました。其の間色々な事がありましたが、大した事でもありませんでした、其の中に、『あゝ艦長は』といふ聲がした。誰かと思ふと平部機關長で、スチーム・パイプを破られたことの報告に來たのであります。そこで私は『俺には解らぬから、どうかやつて呉れ』といふたら、機關長もはつきりと承知したといふことでありましたが、其の時の平部機關長の顏は非常に恐い顏をして居つた。戰爭が濟んでから平部に其の事を申しましたら、私も其の時ひどい顏をして居つたと見えまして、平部が『何だあの時コンパスの鐵球に兩手をかけて斯うやつて居て、ウーと言つた顏は、一生忘れられぬぞ』と言つて居りました。どうもあの時は兩人ともひどい顏をして居たものと見えます。恥かしいことではあるが、あゝいふ苦し

ひ場合、自分では可いつもりでも、矢張そうは參らぬと見えますので、これは深く修養を要することゝ存じます。スチーム・パイプを破られて困難をしました事は戰史に揭げてありますから申しませぬが、斯うして居る中に兼子航海士が、軍艦旗がなくなりましたと注意して呉れましたので、見ると軍艦旗が皆んな落ちて居るのみならず、メーンマストは二段か三段になつて、軍艦旗はない。そこで私は航海士に『旗は何處でも可いから、澤山揭げて呉れ』と命じましたら、岩野浪助といふ掌帆長が突然飛上つて來て、破壞されたマストに登つて、ポートのマストを結付けて旗を揭げて呉れましたが、其の時は實に心持が好かつた。其の事實は今尙私の頭を支配して居る一つであります。併し殘念な事には岩野は鷄鳴島沖で暴波中に投錨の折、外に投げべき錨が艦の動搖の爲內側に落ちて足を轢かれ、それが原因で遂に旅順で亡くなりました。此の岩野兵曹は下甲板から煙の出るのを發見して、或は火災かも知れぬといふので、下甲板に入つて火元を探した、所が非常な音がして居る。是は蒸氣かも知れぬと思つて、直に窓を開いて見たら、蒸氣が窓から出たので、是は

スチーム・パイプが破れたと直覺して直に報告し、更にハンモックから毛布を出してそれを頭から被つて、機關部の人と共に之を防いだ、其の結果非常な事なくして濟みましたのは全く岩野兵曹の功で、實に感ずべき行爲でありました。其の中敵の三艦は彌々近づいて參り、來遠三百といふ時に私は怪我をしまして、軍醫長に手當をして貰つたが、軍醫長の許を得て甲板上に出て見ると、來遠が大火災を起して居る。實に此の時は愉快でありました。

最後に私は今迄人には話をしませぬでしたが、玆に申上げて見ようと思ふ事があります。それは三百米も追迫られて、來遠から打つた彈丸で怪我をしたので、軍醫長の治療を受ける爲めに下に行つて、軍醫長より上に出ても可いと言はれたが、艦橋上の苦しさと慘狀とを考へますと、再びブリッヂに行く氣になれない、併し行かない譯にもいかないので、そろ〳〵上甲板を一周して、それから決心してブリッチに上つたのでありますが、後に兵員の話に依ると、私が上甲板を一周した事が兵員には非常な影響があつたので、航海長が彼處を廻はつて居る、大丈夫であるといふ感じを有つたさうであります。固より私は勇氣が

あつた譯ではないが、下士以下には非常に力强く感じられたさうであります。是は何等理窟がある譯ではないが、何かの御參考と思ひますから申上げます。

ブリッチに上ると、來遠は火災を起して、他の二隻はそれを救援する爲めに停止したと見えて、すぐに三四千米も隔つたので、私は此の機會に於てストップをして、スチーム・パイプを修理して置かなければならぬと決心しました。さうして子供の時から、敵に後を見せるものではないと聞いて居りますので、ストップをするにしても、戰場に頭を向けようと思つて（此の時本隊と敵の定遠、鎮遠の闘つて居るのは充分判らない位でありましたが、兎に角大體が判りましたので）、艦首を戰場の方に廻轉して、機關長に『今は餘り心配もないから、ストップしてスチーム・パイプの修理をして呉れ』と傳聲管で言ひますと、機關長は私の苦しい立場に同情し親切にも、『止めなくても可い、どうかかうか航行しながら修理するから心配するな』というて呉れました。是は私に取つては打擊であつた。あの場合再び戰場に行くことは餘程苦しく感じて、唯艦の頭だけを敵に向けて、ストップする積りで

あつたが、ストップしないでも可いといふことであつたので、今更敵に背後を向けて、逃げる譯にも行かないから、心配しながらも其の儘近づいたのが本隊に合したというて、司令長官の御報告にも、戰場に於て本隊に合したのは感心の至りなりといふ御褒めの言葉を頂きました原因となつたので、最初からあれだけの元氣はなかつたのであります。唯昔から敎へられた敵に後を見せながら停止するなといふ事を實行した迄であります。これも皆樣の修養上御參考になることゝ存じます。そして其の儘戰場に向て進み、暫くして西京丸に出會しましたが、樺山軍令部長の御安否が非常に氣に掛つて、之を知りたいと思つて、異狀なきやと信號させようとしたら、航海士から『自分がこんな姿になつて、異狀なきやも變でせう、止めたらどうですか』と言はれ、それもさうだと思つて、一生懸命に眼鏡で見たいと思つたが、目が利きませぬので、航海士に見て貰つたが見えない。しかたがないから其の儘行き過ぎました。其の中に右舷のバウに當つて、船のやうなものが見える。豫て赤城は運送船を處分するやうにと承はつて居りましたから、それは運送船で兵員が乘つ

て居るかも知れない。あれを片付けようといふ氣になり、其の方に進みました。所が私は眼の負傷の爲めに充分見えないので、私の目の役目をして居る兼子航海士が『あなたは何處に行くのですか』、『イヤ運送船が居る』、『イヤ、そうではありません、何か知らぬが平遠と砲艦のやうなものが見えます』、『それはいかぬね、それでは駄目だ』と言つて針路を變じ、其の中に向ふから打たれましたが、幸に屆かなかつた。此の際自分の目的は主力に近づかうといふ考へだが、どうも心理狀態が少し遊戯氣分になつて居つたと見え、其の中バウに燃えて居る船があるのを見て、是は多分來遠に相違ないと考へたので、來遠なら十々滅を指してやらうと思つて近づくと、來遠ではなく揚威、超勇であつたから、已むを得ず其處を離れて、本隊に行かうと思つた所が、定遠、鎮遠が間に居るので非常に困り、恐る〳〵其の前を通つたが、幸にひどい目に逢はせるやうな事はして呉れませぬで、本隊に合しました。

まだ御話申上げる事もありますが、時間超過の報を得ましたので、不得止是丈けにとめて置きます。

赤城の苦戰

（赤城軍醫長海軍大軍醫）
海軍軍醫少將　臼井宏

私は懐舊の材料として當時の寫眞を御覽に入れ樣と思つて持參致しました。別に御話致す筈では無かつたのでありましたが、講演者として名が掲げてありますから簡單に申述べます。

私は職分上戰爭の狀況を能く存じませぬが、戰鬪開始間も無く艦長が軍醫長を呼び居るといふ傳令が來ましたから、稍ゝ不審に思ひましたが、急ぎ上甲板に出で艦橋に行きました所、傳令の誤りであつたことが判りました。併し偶然にも其の時上甲板に於て戰況を見ることが能き、敵の彈丸のビール壜程のものが空中に舞ひ飛ぶのを三個見ました。恐らく

跳彈であらうと思ひましたが、敵彈中には本當の炸藥でなく、豆、砂その他の物が入つて居たのを戰利彈丸中に發見したと申しますから、此の種類の彈丸であつたかも知れませぬ。兎に角珍らしくも彈丸の飛ぶ所を見ました。

御承知の通り赤城は小さき砲艦で、先づ驅逐艦位のものでありまして、上甲板上の外舷は楯の樣に造られ、戰鬪準備にてこれを外方に遣り放ちますので、上甲板と水面との距離が僅で、外より見れば水面と殆んどすれ〳〵位に見えますから、敵彈の命中率は確かに少かつたらうと思ひます。其の代り平時に於ても、艦長室士官室初め何處でも舷窓を明けて置きますと、航海中は勿論碇泊中と雖も、海水の奔入することは珍らしくはありません。皆が赤城の船室は水族館の樣だと言つて居りました位で、全く水線以下に住んで居るやうでありました。其れに小蒸氣艇の備付は無く、カッターで石炭を運び、其の後に飲料水を積み取つて來るといふ風で、戰鬪は數時間でありましても、戰時の勤務一年有餘の間、其の困難は一と通りでは無かつたのであります。

戰酣なるに及び、本艦は速力低少なる爲め、自然本隊に後れて孤立の有樣となり、來遠經遠、致遠の三隻に追擊せられ、其の上蒸氣管を破られ、蒸氣噴出して速力益々緩となり、六七浬位に減じました爲め、敵彈集中して一時苦境に陷りましたが、最も近く向つて來た來遠を猛擊し、同艦甲板上人影なきに至らしめ、一方の血路を開いて、漸く本隊に合することを得ました。此の間に於ける激戰に於て、乘員三分一の死傷者を出しました。斯かる多數の死傷率は通例敗戰の場合であります。

坂元艦長は艦橋にて海圖を覽られつゝある間、偶ゝ敵彈頭部に命中致し、頭骨を刀で斬つた樣に取去られて戰死を遂げられ、軍帽の周圍と顏面は無疵に殘りました。傷名は頭顱挫斷といふを適當と思ひ、斯く命名致しました。下士官にも同樣の戰死者が一名あり、其の他隨分殘酷の死傷が澤山ありまして、先づ敗戰の狀態は斯くの如きものであらうと思つたのであります。そうして乘員の顏を見ますと皆興奮してゐて、色は蒼白で、眼は逆立ちて居りました。今艦が沈沒するか、爆發するかといふ瞬間には、大抵の人は沈着冷靜を保

つといふことは六ケ敷いもので、唯剛毅の人はこれが外面に現はれないだけで、唯今佐藤中將の告白がありましたが、當時何れも同感であつたらうと思ひます。

十年後の日露戰役に於ては、船體武器其の他萬般の設備が改良され、その進步著しく、戰鬪行爲の難易到底同日の論ではありませんでした。

此處に持參致しました士官以上の寫眞を見ますと、坂元艦長と橋口少尉候補生が居りませんだけで、他の者は其の後三十年も過ぎました今日一人も缺けて居りませず、皆健全に揃つて居ります。當時を追想すると洵に懷舊の情に堪へませぬ。

西京丸の行動

（西京丸航海士兼分隊士）
海軍中將　佐藤皐藏

私は日清戰爭當時は西京丸の航海士兼分隊士として勤務致して居つたのであります。當時通報艦としては八重山一隻丈でありましたが、西京丸は假裝巡洋艦として、八重山と同じく通報艦として使はれたのであります。黃海の戰の當時は樺山軍令部長は戰況視察として伊集院少佐以下の幕僚を隨へられて、西京丸に乘込んで居られたのでありますが、可なり危險な所迄踏込んで行つて、大分苦戰を致したのであります。戰史にもあります通り、戰が始まるや否や、比叡、赤城が速力が不足な爲めに落伍して、非常に苦戰に陷つたのでありますが、樺山軍令部長は之を見て、伊集院參謀に注意せられ、伊集院參謀は私に命じ

て『赤城、比叡危險なり』との信號を揭揚せしめられたのであります。

茲に一言致して置く事は、私は當時僅に少尉の身で、至つて見識もなし、經驗にも乏しかつたのでありますから、當時私の見たことは間違ないとの確信を持つて居る譯でもありません。從つて之を基として考へて居ることも、充分確かであるとは申されませんが、只戰史にない點に就き有りの儘に申上げて、御高評を仰ぐ次第でありますので、其の邊は豫め御承知を願つて置きます。

前に申す通り、『赤城、比叡危險なり』といふ信號を揭げたのでありますが、其の信號に依つて行動を起したものやら、或は自發的に行動を起したものやら知りませぬが、其れから數分間の後、今迄本隊と共に敵艦隊を右舷に見て、盛に交戰しつゝあつた第一遊擊隊が行動を起し、急に左に回頭して本隊と別行動を執り、赤城、比叡を救援する途に出でたのであります。之に就て私はあの信號が全體の上に如何なる結果を及ぼしたかといふ事を考へて見たいのであります。尤も第一遊擊隊は果して信號に依つて、あの行動を起したのかど

うかは存じませぬが、私は信號を揭げた當事者である關係上、あの信號が動機になつたものと假定して申上げます。當時戰爭が開始されたばかりで、揚威、超勇の二小艦が戰鬪力を失つた丈であつて、定遠、鎭遠を初め敵の主力は依然として居つたのでありますから、其の際あの如き行動を執つたのが可かつたかに就て考ふるに、比叡、赤城を見殺にしたかも知れないが、寧ろ本隊と第一遊擊隊とが協力して、敵の主力に向つて飽迄も戰つたならば、あの戰鬪に於て、本隊が非常な苦戰に陷り、不利なる結果に終つたならば——あの當時に於ては、敵は我本隊を苦戰に陷るだけの力を有つて居つたものと考へるのが至當と思ひます——あの行動は日清戰爭といふもの全體に向つて、如何なる結果を及ぼしたであらうかと考へるので、是等は戰史を研究する上に、充分考へて置く必要があることと思ひます。

次に西京丸が水雷攻擊を受けた事に就て申上げます。戰史にもあります通り、西京丸は敵彈の爲めに舵機に故障を起して、戰場にマゴ〳〵して居る間に、更に多大の損害を受け、

僅に修理が成つて、人力操舵によつて航走して居ります間に、平遠、廣丙の二隻と反行戰を交へました。それが僅に千米の距離で反行戰を交へて、又々敵の數彈を蒙り、損害を受けてボヤを起しましたので、少い兵員を更に分割して、消防に努めさしたのであります。さうして居ります中に、敵の水雷艇福龍が前方より襲擊して來ました。當時前方の砲に就いて居る人も少かつたので、樺山軍令部長に附いて居つた幕僚迄が大砲に就いて、之を砲擊したと云ふ有樣でありました。さうして大砲を打ちは打ちましたが命中しないので、敵の水雷艇はドン〳〵進んで來て、其の距離僅に四五十米の邊迄來て水雷を發射したのです。堤分隊長の如きは拳銃を打つたといふ程、それ程接近して發射したのでありますが、幸にして魚雷は船底を拔けた爲、命中しなかつたのであります。其の當時の敵の水雷艇長は今も支那に於て政界に活動して居る蔡廷幹といふ人でありまして、如何に大砲が中らないからと言つて、只一隻の水雷艇を以て砲彈を冒し、白晝攻擊を行つたのでありますから、勇敢な人と申さなければなりません。然るに此の人は翌年二月威海衞の戰の時に、同僚の水

雷艇長を糾合し、自ら主唱者となつて、全隊擧つて威海衛を逃れ出でたのであつたが、遂に沈められて捕虜となつたのであります。砲彈を冒して白晝攻擊して來るといふ程の勇者が、自分の根據地なる威海衛の口の陰山口に碇泊して居る敵を襲擊せんとする精神もなく、同僚を煽動して逃出すといふ程墮落したのであります。昔より退嬰の策を執るものは攻擊精神を失ひ、士氣が墮落して、非常なる失態を演じた例が歷史にも澤山あるのであります が、只今申述べたものゝ如きは、更にそれを證據立てる好き實例なりと考へて申上げる次第であります。

次に先輩佐藤鐵太郎中將より御話のありました赤城の本隊に合する運動に就ての所感を申上げます。私の艦も非常な打擊を受け、辛うじて虎口を脫しまして、戰場を離れて南に向ひ退却した際に於ては、幹部の人々も餘程恐怖心に襲はれて居つた樣に思はれます。此の樣なことを今申しては極りが惡い樣でありますけれども、其の時の感じは其の時でなければ判らないと申してよからうと思ひます。扨て戰場を脫して何處に行かうかと云ふことにな

つた際、或は味方の艦隊の殘部が在泊して居る大同江口チョツペツキ崎沖に行かうとか、或は直接佐世保に行かうとか、或は佐世保に行つても、是程の大損害を修理することが能きないから呉に行く方が可からうとかいふやうなことが評議されたことを承知して居ります。一方赤城はどうであつたかと申すと、我艦は退却の途中に於て赤城と行會つたのであつたが、赤城は一本のマストを失つて、一本マストの艦に見えるので、一本マストの艦ならば敵に違ひないから、避けて通らうといふ話もあつた位であつたが、暫くして赤城である事が判つたので、近寄つて信號しようとした。此方の信號は屆かなかつた樣であつたが、赤城から此方に送つた『本隊に合同しに行く』といふ信號は屆いたのでありました。而して御承知の通り赤城は之を實行して居るのであります。其の行動に就て私は感奮措く能はざるものであります。物質上から言へば、赤城の居ると居らないとは戰爭の勝敗に關係を及ぼす如き大切なものでないから、あれ丈の大損害を受け、辛うじて敵の圍中を脫れた以上、それで任務を了つたものと考へるのは、あの場合多くの人が起し得べき所であらう。

然るに赤城は此の如き姑息の處置を執らず、敢然として其の任務の遂行に向つて猛進した る行動は實に懦夫をして起たしめるの概あるものであつて、帝國軍人の爲立派な教訓を得たものとして、あの行動に就ては非常な尊敬の念を拂ふものであります。兎に角今日となつて考へて見れば、然程のことでもない樣に思はれますが、當時を追想しますと、實に深き感に打たれるのでありまして、此の機會に於て此の事を特に申上げて置きます。

佐藤皇藏中將の御話に就て

釜屋忠道

佐藤君の御話に就て敢て第一遊擊隊の辯護をするのでもありません、又議論もいたしませんが、誤解のないやうに一言申上げて置きます。聯合艦隊に於ては豫ねて戰鬪規約なるものがあり、それが五六ケ條から成立つて居りまして、それに依つて若し敵の本艦

隊と我が本隊第一遊擊隊とが一緒に遭遇したときは、先づ以て第一遊擊隊と本隊とが合同して之れに當り、而して敵陣形が亂れ、或は遁竄するものがあつたら、高速力を利用して、第一遊擊隊は悉く之を擊沈或は捕獲し、本隊は飽く迄定遠、鎭遠と對抗して之を擊滅する。是が戰鬪規約の骨子なのでありまして、第一遊擊隊は其の規約に從つて行動したのであります。成るほど『比叡、赤城危險なり』との信號は西京丸より確かにありました。さうして赤城の窮迫せる有樣、及び比叡が火災を起して非常に苦んで居る有樣は歷々と眼前に見えて居つたのでありますが、此の時敵艦隊の陣形が散々に亂れて、右往左往に分離したので、先づ赤城を救援せんとして第一遊擊隊は其の方向に艦首を廻らし、來遠、經遠、靖遠、致遠の四隻より成立つ艦隊と再び砲戰を交へ、致遠を擊沈してゐる間に、其の後續艦の二隻が火災を起しながら反對方向に逃げて了ひました。是に於て其の先頭の敵艦を追かけましたが、此の時比叡、赤城は如何と見るに、比叡は已に遠く戰鬪線外に去つて、東方に見えなくなり、西京丸も大火災にかゝり、東方遙に見えなくなりました。

初め西京丸が比叡赤城危險の信號をなして間もなく、定遠、鎮遠の三十サンチの大砲が西京丸の方に向けられたのを吾々が見て、そら打つぞ〳〵と言ひ居る間に打ち出しましたが、果せるかな西京丸に中り、爆煙濛々と上り、樺山將軍以下大概は戰死されたことゝ想像した位でありました。而して午後三時半頃には、比叡も西京丸も戰鬪線外遙か向ふに行つて、共に見えなくなりました。併し赤城丈は見えて居りました。此の戰鬪の結果敵艦は皆散亂して、唯定遠、鎮遠の二隻が踏止つて居つた。詰り是は定遠が大火災を起し、運轉の自由を失つたので、鎮遠が之を援護して居つたのであります。我が本隊は或距離を隔てゝ砲火を交へ、第一遊擊隊は右往左往と逃げて行く敵艦を片端から擊沈に力めたのであります。さうして經遠を擊沈したのは丁度千五百米から八百米迄で、非常な火災を起して滿艦火となり、さうして舵が利かなくなつたのか、右に傾いてグル〳〵廻はつて居つて、乘員の或るものは檣に登るやら、大概のものはロープを下げて振ら下がるやら、ひたすら命を助からんと努力して居りました。第一遊擊隊より發する彈丸が命

中又命中、遂に顚覆して船底を水面に露出し、見る影もない有樣となりました。それが丁度五時半であつた。さうして此の時本隊と第一遊擊隊とは七八浬も隔つて居る。而して本隊では豫期の加く、定遠、鎮遠をうまくやつたことゝ想像しながら、段々本隊に向つて進んで來ると、定遠、鎮遠がまだマストだけが見えて居るので、聊か意外に感じた樣な次第、而して本隊に第一遊擊隊の合した時は既に日沒過ぎで、最早どうすることも能きなくなつたのであります。唯此の海戰に於て最も遺憾とする所は日沒になつたことであります。西京丸は戰鬪未だ半ならざるに、遠く戰場を離れたのでありますから、此の海戰の全局を御存じないのは無理からぬことであります。本日茲に此の時の詩を作つて參りましたから、拙作ながら御目に掛けます。(述者その詩を朗吟す)

時恰も舊曆の八月十七日か十八日であつて、月は夜の海を照らし、海上は寂として、晝間の海戰の跡も止めて居ない。死傷に就ても、信號すれば敵に本隊の所在が知れて、水雷攻擊の虞があるので、翌朝に至つて死傷の數、又誰が戰死したといふことを知つたの

であります。今敢て第一遊擊隊の辯護をする譯ではないが、戰鬪規的を遵守して、其の任務を完うした點に於て、實に第一遊擊隊の乘員一同滿足に思つて居る所であります。卽ち本隊と第一遊擊隊が合して、更に大に爲さんとした時に、遺憾ながら暗くなつたので、決して定遠、鎭遠をおめ〳〵と逃がした譯ではないのであります。誤解なからんことを欲して、一言申上げて置きます。

釜屋佐藤兩中將の御話に就て

佐藤鐵太郎

『比叡、赤城危ふし』との信號のあつたことは事實で、第一遊擊隊の來たことも亦事實でありますが、第一遊擊隊は赤城、比叡の救助には效がなかつたと思ふ。戰の濟んだ後坪井司令官が赤城に來られて、私に仰つしやつた御言葉がある。それを述べれば判ると思ひます。

す。それは『比叡、赤城危ふし』といふ信號があつたから、直に救援に來ようと思つたが、さうはいかなかつた。お前の艦の近邊迄行つたが、あの場合さうはいかなくて、直に又離れて氣の毒であつたと言はれたが、是だけ申上げたら、佐藤將軍の言はれたやうな結果はなからうと思ふ。假令さうであつても、あの場合さうはいかない。どうも私は釜屋將軍の仰つしやつた方が、比較的首肯能きると思ひます。あれ以上の註文をすることは事實上困難なこと〻思ふのであります。

比叡の突貫に就て

（橋立艦長 海軍大佐）
海軍大將　日高壯之丞

先刻より段々御話を承はつたが、比叡の突貫に就ては艦長が同クラスであつて、よく知つて居りますから、その事を簡單に申上げて、誤解のないやうにして置きたいと思ひます。則ち當時の櫻井艦長は既に世を去つてゐますから、私が代つて本人に聞いた事及見た事を申上げたいと思ひます。

比叡の艦長がスウインギング・ブームにスパー・トルピードを附けて居るので、如何なる譯かと私が聞きましたところ、その答に『此の艦の備砲でどうする？突貫してトルピードを投付けるより外はないではないか』といふ、そこで私は『それは至極壯快である、贊成

である』と申したのですが、是は戰爭前の事であります。

さて愈々當日の戰鬪となつて、敵陣の中心となつてゐたのは定遠、來遠であつたと考へますが、單縱陣で進む味方の中部を衝き切らうとして突進して來ました。橋立では右舷千三百米から打出しましたが、後續艦が危險と思はれたから振返つて見ますと、比叡は面舵に取つて敵艦に向つてゐました。此の決意は豫ねて承知して居りましたから、覺えず聲が出て『やつた〳〵』と言ひ、手を拍いたのであります。此の時扶桑は取舵を取つて左に避けて居りましたが、是から後比叡は危險に陷つたものと考へます。私はそれ以來戰鬪に忙がしく、暫く見ませぬ中に敵艦隊が間に挾まり、遂に看ることが能きませんでした。

戰後私は大東口に於て比叡を見舞ひましたが、その時見聞したことを申上げて、戰鬪中同艦が非常な困難に遭遇した事に就き、その狀況を明かにして置きたいと存じます。艦長の言はるゝには、『敵艦が前に迫つて居るのに、艦尾旋廻砲は一發打つて後、信管が拔けないので打つことが能きず——艦尾旋廻砲は十七サンチ砲一門で、その射擊に用ふる信管は

ピボット信管と云ひ、舶來のものには故障がなかつたけれども、日本製のものには故障が多く、その時は尾栓を外づして拔き去るを例とした――、之を取去うとして施業中鎭遠の三十三サンチ砲彈が艦長寢室の寢臺を貫き、ケビン(即ち臨時病室)內ミズンマストの下部に中つて破裂し、負傷者手當中の軍醫長看護等悉く粉碎され、彈片は尙ほ甲板の明窓より飛出して按針長等も死傷し、ラダ・ホイール及舵索を破壞して舵を操ることが能きず。敵艦來遠は既に約四百米の距離に肉薄して來て、襲擊隊を前甲板に呼集してゐるのが判つた。然るに大砲は一門も打てず、只氣を焦せる計りであつたが、漸くのことでミズントップのノルデン砲を使用し、此の襲擊隊を打たせたのである。その時敵兵は飛び揚がるやうに折り重なつて仆れ、悲壯の觀を呈した。是が爲か敵艦は最早や肉薄し來らず、此の間にホイールの應急修理を了り、辛うじて虎口を脫することが能きた。それから後に赤城がやつて來て、同じく苦戰に陷つたものと思ふと。私は不圖右の明り取りの圓窓から艦橋の下面を見ますと、黑色の滴樣のものが丁度圓窓の形を成して附着し、ヒラ〳〵してゐるのが目に入りそ

れを指して、あれは何乎と問ひましたが、艦長は言下に『是こそ軍醫長等の肉片である』と答へられました。何と酸鼻の極ではありませぬか。私の話は此れ丈けに致して置きます。

大纛下に在りて

（侍從武官海軍大尉）
海軍中將　川島令次郎

私は戰場に出たのでありませぬから、今日は別に御話する考もありませぬでしたが、出て見ますと洵に盛會で、殊に色々結構な御話を伺つたのであります。此の場合、大元帥陛下には當時如何あらせられたかに就て、一部分でも申上げましたらと思つて、若し時間があつたらと申した所、可いといふことでありますから、一言申上げて見ようと思ひます。

御承知の通り、廣島に大本營を御進めにつき、九月十三日には東京御發輦、十五日に廣島に御着になつたのであります。而して平壤の攻擊は廣島御着の前夜、即ち神戸に御駐輦の時でありました。黃海の海戰は廣島御着二日後でありまして、引續いての捷報、それ迄

の御軫念、又捷報を御聞き遊ばしての御喜び、是は申すまでもないことで、又私共の考へ及ぶ限りでありませぬが、唯外目ながら、いたく御喜び遊ばしたことと感ぜられたのであります。黃海海戰の捷報は十九日夜半既に御寢遊ばした後に到着致しましたので、私は其の日は當直でありませぬで、今の齋藤朝鮮總督が當直であつて、侍從の米田氏と相談の上、斯る吉報は御寢中と雖も申上げなければならぬといふので、御起し申上げて奏上したといふことであります。それで戰勝の結果は追々の報告に依つて、英明なる陛下には充分御諒知のこととは存じましたが、併しどれだけの艦があつて、どれだけが擊沈されたかゞ明瞭になつて居つたら好からうと存じまして、齋藤侍從武官と相談しまして、誠に粗末なものでありましたが、支那の艦隊と日本の艦隊と對照致しまして、艦の大きさ、裝甲の有無、砲數、魚形水雷發射管等が御解りになるやうに、略圖式の對照一覽を作製しまして、是に沈沒した軍艦が明白になるやう符號を附けて御手許に差上げました。それは海戰の四日後でありましたが、大層御喜び遊ばして、洵にはつきりして好いと仰せになつて、其の圖を御座所

の卓子――と申しても普通の卓子の倍位のものでありまして、御軍務をみそなはすも御食事を遊ばすもこれ一つ、其の横の小さな圓い卓子――の上に御置きになつて、其の夜侍從長が上り、宮内大臣が上りますと、今日は擊沈した艦を肴に飲ますぞと仰つしやつて、陛下は先づ來遠で飲め、致遠で飲めといふやうに艦の名を仰せになつて盃をたまはり、又暫くすると揚威で飲め、超勇で飲めといふやうに艦の名を仰つしやる。御前に伺つた人には其の圖に氣つかず、どうも御記憶が好い、支那の軍艦の名を一々仰つしやると言つて、陛下の支那の軍艦を御存じになつてゐるのに感心して居りましたが、それは今の圖を時々御覽遊ばして、後々と艦の名を仰つしやつたのでありましたが、是により如何に陛下が海戰の大捷を御喜び遊ばしたかと云ふ事を偲び申すことが能きると存じますので、爰に之を御紹介致して置きます。其の後樺山軍令部長にも、何々が沈んだと云ふ事の話から、斯ういふものがあると仰せられて此の圖を御示しになり、軍令部長は之を拜借になつて、大本營海軍部に於て復製し、印刷に附されました。

威海衛の役其の他

防材破壞に就て

（第三艇隊艇長海軍大尉）
海軍大將　鈴木貫太郎

私は黃海々戰の當時は對州の警備を致して居りまして、參加を致しませぬ。其の大勝利の後に艦隊に加はつたのであります。而して其の後の戰としては威海衛の役でありますが、其の時の防材破壞に就て話をしろといふことでありますから、それだけを申上げます。

當時の水雷艇は御承知の通り何れも小型で、私の乘つて居つたのは六號艇であつたのであります。而して防材破壞に就ては前以て各艇の間に協議が出來て居つて、第三艇隊の今井司令が引受けて、更に司令から六號艇及び十號艇に其の仕事を命ぜられたのであります。

それから水雷艇の夜襲は陸上諸砲臺を占領した後に、防材を破壞してから直に實行しようといふことに約束されたのであります。而して陸上砲臺は既に一月三十一日迄の間に陷落して居つたのでありますから、二月一日にやる豫定で居りましたが、三十日か三十一日かより暴風が起つて、それが三日程續いた爲めに實行が能きなくて、漸く二月三日に實行することにしたのであります。さうして當時艦隊も水雷艇隊も陰山口に碇泊することになつた。陰山口は支那艦隊の碇泊地たる劉公島から十浬ばかりの所であつて、殆ど目と鼻の間で、恰も横須賀で横濱に向つて作戰するのと同じ狀況であります。若し敵が少しく勇敢に活動すれば、日本の艦隊は可なり困難をしたと思ひますが、敵は既に敗北に萎縮して、何等さういふ企てもない。所が我が軍は意氣大に昂り、敵を呑んで居りますから、悠々と行動したのであります。而して其の時は十時迄に防材を破壞して歸れば、第二艇隊及び第三艇隊が十二時に出發して、夜襲を行ふといふ約束であつたのであります。

私の艇は日沒後時間を見計つて陰山口を出發し、威海衞の東に向つて進み、防材破壞の

途に就いたのであります。是より先き威海衞の防材の位置は略ぼ判つて居ります。併し如何なる防材で出來て居るかゞ判らない。それに徒らに何處でも構はず破壞しても、後に襲撃に行くとき方向を取らなければならぬから、何等か一つ據點を取つて、それから破壞しようと考へて、丁度鹿角嘴の砲臺と龍廟嘴の砲臺の間に半浬程の岩石の淺瀨があつて、其の鼻の所に二三尺の高さの岩があり、その先きが深くなつてゐて、それから防材が張られて居るので、兎に角其の岩を目標とし、それから破壞せんと考へて、之れに向つて進んだのである。所が一浬位にして防材に近づいたと思ふ頃、進路に當つて火が見える。併し其の火の性質が判然しない。敵の警戒の火か、或は日本軍の陸上の火であるかも知れない、どうも水の上に映つて居るので、其の距離が判らない。そこで時間を費しても已むを得ない事だから、鹿角嘴の砲臺迄人を出して、燈火の位置を確めて行動しようとして、鹿角嘴の灣内に入つて、篠原少尉を陸上に派し、陸上からよく視察すべく行動したのであります。所が篠原少尉を出してから考へると、砲臺に行つて歸つてから防材を破壞するとなると、

十時迄に陰山口には歸れない、從つて其の夜の襲撃には到底間に合はないことになるから、此の狀況を報告をして貰はうと、隣りに居つた十號艇にメガホンで話をすると、中村松太郎大尉はそれは困る、防材破壞に來たのであるから、兎に角共に仕事をしなければならぬと主張されたが、襲撃の時間もあるし、司令は吾々の成功を待つて居るであらう、其の時間の齟齬することも困るから、歸つて此の旨報告して呉れと强いて賴むと、中村艇長もしぶ〳〵それでは報告しようと言つて、其處で別れました。軈て一時間もすると、篠原少尉が歸つて來て曰く、あの燈火は此處で見ると、將に破壞せんとする防材の位置に見えるが、全く陸軍の燈火であると。之を聽いて大に安心したのであります。尙其の時篠原少尉の言ふには——是は私が何も申した譯ではありませぬが——、何れ防材を破壞した時には、敵の砲臺其の外哨艇から必ず射撃するであらう、其の時は鹿角嘴の砲臺から應援して、敵を砲撃して呉れと、少尉の一存を以て依賴して來たといふことでありまして、それは好く賴んで來て呉れたと申して、兎に角其處を出て、防材の位置に進んだのであります。然るにど

うした譯か、今迄に偵察した事から考へて、防材に突當らなければならぬのに、行けども行けども防材が發見されない。既に最初豫定した岩の位置も、左舷によく判つて居ります。何しろ其の日は前日の荒天に反し朧月夜で、大さう靜かでありまして、港內は薄氷さへ張つて居つて、內に進むに從ひ氷が割れて、微妙な音をして居りました。併し岩は見えたが防材には突當らない。軈て一浬も中に入つて——一浬と云へば小さい灣內では敵の哨艇にも近く、直ぐ近くに見えるといふ有樣であります——氣の付いたのは、今通つた所は敵が自分の通路として開いた水道であつて、その水道に入つたに相違ない。防材は側にあつたが、發見能きなかつたのであらうと思つて、僅か一點程反對の航路から左に行くと、果して防材に突當つた。さうして丁度二千米か三千米位の所に敵の水雷艇が六隻ばかり居るやうである。よく見ると如何にも六隻が揃つて碇泊して居るやうな形であつた。碇泊して居るなら少しは打たれても、相當大膽な事をやつても差支はないと考へまして、內から直ぐと防材に水雷艇を當てたのであります。是が今日の驅逐艦等では斯る動作は能きないが、

當時の水雷艇は僅に五十噸で三十五米、丁度今のベデットの少し大きい位のものであつたから、防材があると、好い加減な所でストップをして、ずつと行くと突當つて、頭で之を押して居る中に水雷艇の速力も止まつたから、直ぐ水雷艇のバウから人を防材の上に降して、舫を取つて防材の下に爆藥を結付け、それが終つてから、今度は舫を取つて、ゴー・アスターン・スローで下がり、約十米の所に來て爆藥を發火する豫定で、其の通りに行つたのであります。所が其の防材は當時日本の海軍で用ゐた防材とは餘程形が違つて居ります。それは太さ一尺五寸角から二尺位で、長さ二間ばかり、それを九尺置きに並べて、縱に並行して段々並べてあり、五吋か六吋もあると思はれるやうな太いスチール・ワイヤーを通してあつて、兩端と眞中に三重にワイヤーを通してある。殊に巧みなのは防材の孔にワイヤーを通して、其の兩方の端には馬尼剌ロープのストランドを解いて、それをワイヤーに絡付けて、孔の兩方から挾込んであつて、存外鞏固に出來て居りました。私は獨逸に留學中、キール軍港の防材を或機會に見ましたが、丁度それと同じ裝置であつて、太いワイヤーを

三重に通してありました。それを百米か或は二百米か知れませぬが、大きな束にして巧みに疊み、トロッコの上に積んだ儘倉庫に入つて居つたが、其のトロッコの下にはレールがあつて、一度びストップを解けば、其の儘水中に行つて、唯それを繫げば防材が出來るといふ裝置になつて居ります。何でも二時間あれば、キール軍港を防材で鎖ぢることが能きると言つて居りました。此の事實から考へると、威海衞には獨逸の將校が澤山居つたのでありますから、同じ形式を採つたのであらうと思ひます。兎に角前申した通り、最初水雷艇で頭を打付けて爆藥を結付け、ゴー・アスターンで下がり、十米位の所でキーを押す考でありました。所が運惡くも電纜を捌く一等水兵が捌きながら錨の爪にそれを引つかけて、切つて了つたのであります。其の電纜は全くなけ無しのもので、艦隊には別にその用意はなかつたので、丁度大連に居りました時に、郡司大尉が柳樹屯の防備隊司令の如き職務で居られましたが、其處に行つて僅なものを貰ひ、又爆藥とても今日の如く整備して居りませぬので、矢張り貰つて來て、自分でそれだけの裝置にしたのであります。所が其の電纜を切つ

て了つたので、非常に落膽をしました。それから色々考へた結果、水雷艇には所謂瞬燃信管が何發か準備してありますので、それを使ふことにして、今度はゴー・アヘッドで同じ所に行く積りであつたが、二米か三米は違ひました。兎に角行つて頭を突付けて、上崎上等兵曹、是は洵に沈着な勇敢な男でありますが、私がやりますと申しますから、それではお前やれと申しまして、矢張り防材の下に手を入れて、スチール・ワイヤーの下に爆藥を結付けまして、今の瞬燃信管を上崎が取つて一番バウに居り、私はゴー・アスターンを掛けて、極くスローにして船を退げて行きます。さうして上崎は拳銃を執り、瞬燃信管の綱を段々手繰つて拳銃を打ちますと、爆藥は見事發火しました。すると今迄鳴りを鎭めて居りました敵の哨艇六隻及び日島の砲臺から盛んに砲擊し始めました。併し所謂暗の鐵砲で、狙つて打つことは打つのでせうが、彈丸は皆吾々の頭の上を通つて行く、又篠原少尉の依賴に依つて砲臺からも應戰し、敵の哨艇及び日島に向つて攻擊しました結果、敵の砲擊も暫くにして止みました。是で第二回目は成功し、次で第三回目は矢張り同じ所にボート

を持つて行つて、眞中のスチール・ワイヤーを切ることにして、是れ亦成功しましたが、爆藥が發火すると、兩方の砲戰が頭の上で始まる。四回目はどうもスチール・ワイヤーが切れませぬでした。併し爆藥の準備もないことであるし、又入る時に航路だけは判りましたので、敵の艦隊を襲擊する水雷艇の行動には差支ない。防材破壞の目的は充分には達せられなかつたが、マア滿足して歸るより仕方がないと思つて、內側から元來た道に向つて歸りました。所が防材の端末は今申す通り一尺五寸から二尺位の材木が二つも三つも重つて、それがブイの如くになつて居つて、その端末から片方の岩の所迄約百米から百五十米位もあつた。それだけの場所が敵の通路として設けてあつたことが判つたので、喜んで歸つて司令に詳細報告を致したのが十二時過ぎでありました。併し今より直に襲擊する方が都合が好くはあるまいかと思つたので、『直に決行したらどうですか』と司令に提言した所が、司令は『前に君からの報告に、十二時過ぎでなければ歸れない、到底今夜は間に合はないといふことであつたから、第二第三艇隊に其の旨を通じて、今日は止めることにした、今

からやるのも面倒であるから、翌日にしよう』と云はれ、それで其の日は決行されなかつたのであります。事實それだけであつて、艇には何等の損害なく、別に大した苦も感ぜず、樂々と防材破壞の目的を達しましたが、是は全く天祐に依るので、洵に仕合せでありました。殊に四日の襲撃には第三艇隊が先きになつて、第二艇隊が後に續いて行きましたが、而かも第三艇隊の先頭に貴樣行けと言はれて、今井司令から非常に稱讃されたことは實に感激に堪へなかつた次第であります。尙威海衞の戰に於ては、失敗もあり滑稽な話もあり、悲慘な事もありましたが、時間もないことでありますから、是に止めて置きます。

唯玆に附加へて申上げて置きたい事は實は威海衞の襲撃に際して、私の艇は水雷を發射したことは發射しましたが、一發は氷に閉ぢられて半分しか出ないで效を奏しない。他の一發は激浪の爲めに、發射管から飛出して奏效せず、僅か二發の水雷を無效に歸せしめ、殊に敵艦百米以內に近づいたので盛んに打たれ、彈丸も隨分喰つたのです。それで防材破壞のとき沈着に三回とも爆藥を扱つた上等兵曹の上崎辰二郎は此の水雷が效を奏しなかつた

ことを非常に殘念に思ひまして、勿論同人の間違といふことは見出し得ないのでありますが、發射管使用の上に自分の智力の及ばなかつた點があつたことを後に氣付きまして、何でも威海衞襲撃後一ヶ月程して、李鴻章が支那を立つて講話談判に來ることを知つて、最早や自分の過を償ふに足るべき戰功を樹てることが能きないと考へて、遂に割腹して死にましたが、洵に責任觀の强い立派な男でありました。吾々も同情に堪へませぬので、司令初め多數の人の贊同を得まして、横須賀の御祖師樣の堂前に記念碑を建てました。此の間行つて見ましたが、地震にも倒れずに、今以て上等兵曹上崎辰二郎の碑として殘つて居ります。既に三十年も經まして、記憶して居る人は甚だ少いと思ひますが、若し横須賀にでも行かれたら、序に一度御覽を願ひたいと思ひます。

威海衛の役前後の逸話

（扶桑分隊長心得海軍少尉）
海軍大佐　吉川孝治

先日有終會長より本日何か話があつたらするやうにといふことでありましたが、當時私は少尉で、分隊長心得を勤めて居りまして、位置が低かつたので、樞要な事には參與して居りませんから、從て範圍が狹く、格別御話申上げる材料を持ちません。殊に今まで有益な御話がありましたから、私は餘興的話柄を以て、五分間程申上げて見ようと思ひます。

當時の鎮紫艦長三善克己といふ人は古武士の風のあつたなか〳〵元氣な方でありました。此の方より直接に承り、又た私も現に見た事實の水雷艇が酒と肴になつたといふ逸話であります。それはどういふ譯かと申しますと、丁度威海衛が落ちる際で、敵の水雷艇二

三隻が港外に脱出し、陸に沿ひ芝罘を指して逃げました。それを見た鎮紫は直ちに之を追擊しました。所が水雷艇は芝罘に達しない中に自ら淺瀨に乘上げ、乘組員は上陸して逃げたのでありました。そこで鎮紫は其の中の一隻を捕獲して、艦尾に曳船して來ました。

所が吾水雷艇隊を率ゐ威海衛に飛込み、敵艦を襲擊した今井兼昌といふ艇隊司令は此の偉功を奏すると同時に、自分の乘つて居た司令艇も失つたので、敵艇を捕獲して自分の乘艇にしようと考へ、麾下の一艇に乘つてやつて來て見ると、早や既に鎮紫に捕獲の先を越されて居るから鎮紫に近づき、今井司令は聲を張り上げて『其の水雷艇を自分に呉れ』と申込みました。三善艦長は艦橋から『只ではやれない』と斷りますと、それでは此れと交換して呉れないか』と、何處で射止めたか一羽の白鳥を高く揭げて見せました。艦長は其の白鳥に心を動かされ、遂に交換談判も圓滿に解決したのであります。

此の二人は何れも豪傑で、酒豪たる點も能く似て居るやうでありましたが、白鳥を得た三善艦長は酒を飲む毎に之を下物にし、當分うまく飲めるとほく〳〵もので、此の方が水

雷艇より餘程好いというて喜んで居りました。

此の事があつて間もなく、威仁親王殿下が松島艦長に補せられ、戰地にて松島に御乘艦になられました。公務外の餘談に或時三善艦長より白鳥と水雷艇との交換談も出たので、殿下には『其の白鳥は今も持つて居るか』と仰せられたから、『イヤ肉は誠に結構で、晩酌にやつて居ります』と、喰ひ掛けは恐れ多くて差上げ兼ぬる旨をほのめかしますと、殿下は『肉はどうでも宜しい、剝製にして見たいから、皮があれば』との仰せであつたので、三善艦長は始めて安心したのみか、實は肉を喰べてしまへば皮などは用がないから、筑紫に歸艦するや早速に白鳥の皮を献上致しました。然るに豈圖らんや此の献上物に對し、殿下より四斗樽入の清酒を賜はりましたから、有り難く之を頂戴して、三善艦長は此の上もなく喜びました。是が則ち水雷艇が酒と肴になつたといふ昔の書物に出て居りそうな逸話でありまして、又た一方からは戰地に在りながら綽々として餘裕のある點は一の美談とも申されませう。

大同江に於ける天然船渠に就て

（第一艇隊艇長海軍大尉）
海軍大佐　笠間直

順序として私の番になりました。私は威海衞襲撃の事をお話し致すつもりでしたが、威海衞に於ける第一艇隊夜襲の事は既に戰史にも掲げてありますので、別に申し上る程の事もありませぬ。又日清戰爭の講話の場合、諸方で話を致しましたのと大して異つた事もないのであります。唯茲に申して見たいと思ひます事は、先程鈴木大將から御話のあつたあの小さい長さ三十五米五十噸前後の水雷艇が如何にして戰地に於て其の船底を塗換へ、各所に於ける戰鬪任務に服したかと言ふことであります。之を日本に於て塗替へることはあの場合到底時間が許さず、又單獨歸港も危險でありましたので、何とかして塗替へて、遼

東半島の戰に用ゐたいといふので、種々考慮せられた末、大同江の干滿差の多いのを利用し、急速に塗替へることになつたのであります。是に就ては造船の方の福田馬之助君が充分御承知でありますが、今日御出席になりませんから、私が知り居ります事丈けを申上げて見たいと思ひます。

どういふ方法で船底塗換へをしたかと申しますと、御承知の通り大同江は干滿の激しい所でありまして、約七八呎もあつたかと記憶しますが、三十五米の水雷艇の吃水は四呎位でありますので、先づ最も潮の高い時を見計らつて、適當の位置に標をして、それから潮が引いた時に鐵道線の枕木の如きものに錘を附け、浮ばないやうにして適當に並べ、之れを船臺としたのであります。滿潮の時其處に水雷艇を曳き來りて繫ぎ止め、兩舷側に支柱を立つて倒れざるやうにし、潮が引き始めますと艇首の方から乾上つて來ますのです。さうすると將校と水兵が工作船の人と共に船底を洗ひ始め、出來上りたる部よりラジンを塗り始め、スクリュー迄塗り終るのです。干潮の終りより滿ち始め迄約二十分か三十分もあ

つたかと思ひますが、潮が來始める迄の間は悪い所を修繕といふ具合にして、塗り方を終るのです。さうして潮が一杯になると、今迄あつた水雷艇を引き出し、次の艇を交代に船臺に引入れるのでありますが、其の時に汽力のない艇は小蒸氣船で曳き出すこともありましたが、多くは機械を動かして出入りをいたしましたのです。斯の如き方法に依つて全部十何隻といふ水雷艇の船底塗替へを行つたので、遼東半島の戰ひから威海衞の襲擊共の陷落迄任務に服して居りました。中には旅順の船渠に入つたものもありましたが、大體塗替へたもので、威海衞迄從事することが能きましたのです。私が大同江に行つたのは二十七年の十月末と思ひます。それから船底を塗替へて、艦隊に隨行したのでありまして、遼東半島の攻擊より二月六日の威海衞の攻擊迄濟まして、旅順に引上げたのであります。簡單ではありますが、大同江に於ける船底塗替へといふ事が單に一場の應急手段に過ぎざるものゝやうに思はれますが、今より考へて見ますと、如何に從軍者がその職務に熱心努力し、戰鬪各般の事を整備したかといふことを追想するのであります。日清戰爭の勝利は武器の

優秀なるにあらずして、全く熱心努力の賜と申しても可いかと思ふのであります。大同江に於ける水雷艇船底塗換の事は日清戰役中の珍らしき一つの仕事と思ひまして、記憶のまゝを御話し申上げた次第であります。

第四遊擊隊の一艦として天龍の行動

（天龍分隊士海軍少尉）
海軍中將　堀内三郎

會長より今日何か話をするやうにとの御註文を受けましたが、私の所屬は第四遊擊隊の而かも天龍といふ非常に立派な軍艦で、晴の戰場に伴はれた事もなし、何をして居つたかと言へば、根據地の警備、陸軍の輸送援護、人馬材料の陸揚げ、馬を積んだ船を引張つたり、陸兵をボートに乘せて引張つたり、斯る仕事に從事して居つたので、別に申上げる材料もありませぬ。威海衞の總攻擊の時、漸く彈丸の飛ぶ所に出たのでありまして、それ迄は戰場に出られない事を憤慨して居つたのであります。

先刻から先輩諸氏より色々御話を伺つて、今昔の感に堪へませぬ。當時は今とは違つて、

船は舊式であり、通信設備も不完全で、非常に困難をした事は、其の後吾々が參加した日露戰爭の比ではなかつたのであります。曾て伊東元帥在世の當時、黃海々戰の記念日か日露戰爭の記念日かに、傍に居られた東郷元帥を顧みられて、『日露戰爭は大きな戰爭であつたが、日清戰爭の時分はどうも戰がやり難くかつた、何しろ今日の如く無線電信といふものはなく、一旦離したら歸る迄何も指圖が能きない』と言つて居られたが、此の一語を以て盡きて居ると思ひます。吾々日露戰爭に關係した者は充分解つて居ると思ひます。それで吾々の經歷した一二に就て申上げて見ようと思ひます。

先刻日高大將は比叡はスパー・トルピードを以て敵艦に突貫する積りだつたと言はれましたが、吾々の艦も同樣であつたのであります。何しろ目指す敵は鎭遠、定遠、來遠、經遠、是は裝甲艦であつて、後の致遠、濟遠等は砲艦或は巡洋艦であります。そこで吾々の艦でも、如何なる場合に打當らぬとも限らぬ、其の場合はどうするかといふ事に就て非常に頭を痛めました。大砲を打つても負ける、どうしても接戰するより仕方がないといふので、

色々と考案しましたが、結局どうしたかと申しますと、スウインギング・ブームの先きに棒をつぎ足して、其の先きに十六斤四分一の綿火藥のケース二個を附け、ワイヤーが着いて居つて、愈々接觸したらそれを出す、併し接觸しても向ふの機械力が强くて跳ねられる、それを跳ねられない爲にはどうするか、當時吾々の艦は三本マストでヤードを有つて居る、さうして臨戰準備にはポイント・ヤードと言つて、ヤードを斜めに縛つて了ふのでありますが、そのポイント・ヤードをといて眞直ぐに直ほす、色々工夫して、片方にケッジ・エンコル、又片方にはストリーム・エンコルをぶら下げる裝置をなし、愈々戰場に臨む時はそれを下げて居る、さうして接戰の場合には、スリップ・トグルで錨を落して、敵艦のどこかに引掛けられるといふ裝置をしたのであります。其の外に又士官以上の智慧でなく、下士官の智慧でありますが、砲彈で水面下に澤山孔を明けられるので、コリジョンマットを澤山作らなければならないが、御渡りのものは二つしかないから、それでは足らぬといふので、ハンモックや毛布五六枚も束ねて、毎日一生懸命に縫つて、漸く五六枚出來ました。今申すと冗談

のやうでありますが、當時は眞劍であつたのであります。斯くして色々準備しましたが、更に敵と打合ふやうな所には行かない。漸く威海衛の攻擊に參加することが能きましたが、是とて敵艦と接戰する譯ではなく、海上の戰爭が終つてから、鹿角嘴、趙北嘴等の占領砲臺より港內の敵艦を打ち、又同時に劉公島に殘つて居る砲臺の背後を打つのに對して、海上より牽制砲擊をするといふ大さう適當な役を仰付かつたのであります。而して第四遊擊隊としては天龍、海門、大和、葛城等であつて、劉公島の低砲臺には二十四サンチの立派な大砲を備へた砲臺がある、それを目標としたのであります。而かも其の砲臺を破壞する目的ではなく、所謂牽制でありますから、餘り深入りするな、又其の前にも敷設水雷があるから、何米の何處の線から、何處の線には入るなといふやうなことで、それでも三回ばかり打ちに行きました。併し運動の區域は制限されてあるので、砲を打つか打たないかに又廻つて來なければならない。所が今日も大和、武藏は測量艦として使はれて居りますから見れば解りますが、其の當時の大砲といふものは恰も西洋館の窓より顏を出したやうなもので、

旋廻は僅で射角は極めて狹い。射程はどの位かといふと、十七サンチの旋廻砲で、左舷にも右舷にも持つて行けるものが一門、是が五千米少し餘であります。それから貫中に十二サンチのクルップ砲、是が四千米、艦に十五サンチが一門、ケビンの中に一門、是は約五千米であつて、艦の歩く所は七八千米でありますから屆かない。折角打合ふ所に行つたのは可いが、どうも此方の彈丸は屆かない。此方は一と廻り廻つて、打方止めで甲板掃除を濟まし、一服喫つて居ると、向ふからビュッと來て近くに落ちる。是は餘り氣持の好いものではない。而して艦長の賴みとするのは前方のクルップ砲であつたのであります。其の時十七サンチ受持の分隊長は陸戰隊を率ゐて、鹿角嘴の砲臺の砲臺長として出張を仰付かつたので、分隊士の私が前方を預つて居たのであります。それで最初は普通に打つたが、一發しか打てない。是ではいかぬといふので、砲門の上のネッチングが外れるやうになつて居るので、それを外すして、砲門を斯ういふ風に拵へて、クルップ砲で横栓式でありますから、仰角一杯にすれば轉把がつかへて廻らない。そこでどうするかといふと、裝塡して尾栓

を締めたら、尾栓の轉把を拔いて、砲尾が下がるだけ一杯下げる。それで何千米になつて居るか判らないが、是より仰角はかゝらないといふ所迄下げて、さうして一廻りする間に、第一回は一發しか打てなかつたので、艦長がどうか工夫して二發打てないかといふので、段々研究すると、あの大砲は今日とは違つて、照尺は砲身の右に附いて居ります。それ故一番最初に砲門の此方側に砲身の着く迄旋廻して置いて打ち、今度は此方に一杯旋廻して、ピタツとくつ附けて置いて打たうといふのだが、それがなか〳〵うまく行かないのです。それは一杯此方に附ける樣に大砲を旋廻すると狙が利かない。そこで砲身の左の方に棒を立てゝ糸を引張り、假の狙ひ線をこしらへて、砲門の一側に砲身を附けても、此方から狙へるやうにして一發打ち、それから大急ぎでそれを引張出して裝塡し旋廻して、他の方に一杯附けて、今度は固有の照尺で打つ、斯の如き方法にして、漸く艦が一廻りする中に二發打つことが能きたのでありまして、偶々彈丸が陸岸に屆き、爆發して砲臺前岸の雪を吹飛ばすのを見ると、艦の中では拍手をするといふ風でありました。それで第二回目の時であつ

たが、後續艦葛城は深入りしようと思つたのか、普通の航路より內に入つて、まだ打つて居る。吾々は勇ましいなと言つて喝采した譯であります。所が葛城の前方の十七サンチの所に敵の二十七サンチが中つて、大分死傷が出來ました。三回目には自分の艦に一發命中しました。其の御話をする前に一寸御話する事は、それは有終の何號かに揭げてあつたやうに思ひますが、大連灣を占領した時に、吾々は直に砲臺の見學に行きました。當時大連の砲臺には、二十四サンチの新しい立派な大砲があつたのであります。それから陸軍の兵隊の案內で彈藥庫に入ると、豆が非常に散亂して居る。何か知らんと思つて居ると兵隊曰く、鐵砲の彈丸の中に入つて居りますと。そんな事はあるまいと言つたが、入つて居りますと言ふ。更に陸軍の兵が信管の頭を拔いた。通常榴彈の中を見ると、確かに入つて居りました。それを引操返すとザラ〳〵と出た。其の時私は支那が炸藥の積りで胡魔化して居つたなと思ひました。さういふものを見ましたので、支那の豆彈などは恐くないと言つて威張つたが、實際此方の彈丸が屆かないで、向ふのが來ると餘り心持が好くない。其の

上に劉公島砲臺から豆彈でない本當の彈丸を中てられたのであります。この第三回の砲擊は二月十一日でありましたが、砲擊を止めて、前部の旋廻砲を結んで、十五サンチだけ打つて居つたので、自分はフォクスルへ上つて彈着を見て居つたのでありましたが、何だか彈丸が中つたやうに思つたから、直ぐと自分の砲の所に行くと何等故障がないが、舷門の所が滅茶々々になつて居る。それからやつと其處を拔けて行つて見ると、メインマストが半分、デッキには十尺に九尺位の孔が明いて居り、死傷者も大分あり、後部の一番分隊長が聲を嗄して指揮して居る。自分もそれを手傳つたが、それは豆彈ではなく、劉公島の低砲臺の二十四サンチの鋼鐵榴彈でありましたが、若し通常榴彈であつたら、もつと破壞されて居つたことと思ひました。此の彈丸は後部十二サンチ砲の駐退機の頭に中つて其處で破裂し、その邊の甲板をバリ〳〵と破つて大孔を明け、其の彈頭は何處に行つたかと思ふと、下甲板に飛込んでダウントン・ポンプに中り、機關部の罐室の上の甲板に喰ひ込んで居た。もう少し行かうものならボイラーを爆發さする所でありました。其の時非常な效果を

認めたのはマントレットであります。機械室のハッチの下に、三吋位の綱で網を拵へて、それを張つてあつたので、甲板の破片、スプリンターや何かは落ちてきて、此の網に乘つかつてゐたのでありまして、機械室を上からのぞくと、機械は其の下で廻轉して居りました。機械は今の機械とは違つて、ホリゾンタル・エンジンでありましたから、破片を滿載した網はシリンダーの上に載つて居つて格別の邪魔もせず、機械は廻轉して居つたのであります。それから一番分隊長に應援をして、十二サンチ砲の照準索や何かを外づして之を網の四隅に引掛け、引張上げさせたら、大きな木片の山が上つてきて、非常に其の效果を認めたことがあります。それからもう一つ申上げたい事は其の時後部の砲の受持の一番分隊士でありましたが、彈丸が中つたので、ケビンのカーテンを開けて覗いて居りましたが、ビシヤツと閉めて、そうして終り迄砲擊を續けて居りました。其の冷靜なる態度には大に敬服して後に聽くと、砲員に見せるのは良くないと思ふたから、彼等が見ぬ樣に閉めたのだといふことでありました。是等は心得て置くべき事と思ひます。其の時の話をすれば隨

分多くありますが、是は此の位に止めて置きます。

兎に角吾々は威海衛の總攻撃の際は色々な仕事に從事致しました。夜は水雷艇に對する哨戒、晝は前面の警戒といふ任務であります。所が或日前面の警戒中白晝敵の水雷艇が飛出した。是は襲撃するのかと思ふとさうでない。而かも一隻出たかと思ふと、二隻、三隻と續々十數隻出て來るので、直に遠距離信號を揚げると、第一遊撃隊の吉野、秋津洲が出て、此の水雷艇を芝罘の方に追つて行つた。更に又後方に居つた本隊の松島、橋立、千代田等が追撃し、遙か視界外に影を沒して了つたのであります。そうしますと殘つて居るものは第四遊撃隊のみであります。所が其の時警戒して居つた味方の水雷艇が占領砲臺からの通信を傳へて來たのであつたかと思ひますが、何でも近くに味方の水雷艇が來て、敵艦が突破を行はうとする模樣があるといふ。眼鏡で見ると、沈んでゐない艦が盛に煙を吐いて居る。先任艦長が心配して、之を本隊に通報しようとしたのですが、當時無線電信といふものはなし、水雷艇を出さうと云つても、其の頃の水雷艇は全速二十節は出ましたが、

何しろ連日の行動でさうは出ず、「又警戒の必要もあり、已むなく海門に全速を以て本隊に通信せよと命じて、海門は出ては行きましたが、なか〳〵追着かない。敵の水雷艇が白晝飛出すのでありますから、或は殘艦も秦皇島か何處かに逃げるのではないかとも考へられまして、一時は大に心配しました。幸にして出て來ませぬでしたが、本隊の影は見えないし、隨分心配を致したのであります。此の邊が伊東元帥の云はれた戰がやり難くかつたといふ事の極めて小さい一例であります。尚是に類した話もありますが、後に御話なさる方もありますから、是で御免を蒙つて置きます。

戰役中航海に關する事ども

（松島航海長海軍大尉）
海軍中將　石橋甫

私は日清戰爭の開始される前年から臺灣征討の終つた後迄、丁度足掛五年、艦隊旗艦松島の航海長を勤めて居りましたので、先刻釜屋中將より日清戰爭の始まる前の事を話されましたが、私も當時の狀況を追想して、懐舊の情に堪へなかつたのであります。

本日の講演は成るべく戰史に現はれて居ない事柄を話すやうにとの御註文でありますので、種々考へて見ましたが、材料を得るのに困りました。實は生徒時代以來の可なり詳細な勤務日誌を有つて居りましたが、日露戰爭中軍艦高砂の沈沒と共に失ひましたので、今日は唯自分の印象として殘つて居る事しか御話が能きませぬ。而かも三十年も經過した昔

の事であり、極めて朦朧たる記憶から語り出すので、餘り御參考になるやうな話の能きないことを遺憾に存じます。其の點前以て御宥恕を願つて置きます。

軍艦松島は最初から司令長官の旗艦となつて居りました。唯黃海の海戰に於て大破しました爲め、一時將旗を橋立に移し、內地に歸つて修繕しました。其の間約一二ヶ月の間は旗艦でなかつたが、それ以外にはずつと旗艦として長官が乘つて居られました。さうして開戰間際に艦隊航海長といふものが出來まして、旗艦の航海長は責任が輕くなつたやうではありますが、兎に角常に嚮導艦として行動しますから、自分としては非常に責任の重大なることを感じて居りました。

先刻の御話の如く、松島、千代田、高雄は何れも便宜な行動を取つて福州から釜山に向ひましたが、松島は釜山に入港します時、絕影島の側から陸上の二個の指導標を一線に見るべき行船法程を嚴守して航進し、速力を減じて間もなく、突然暗礁の上に乘り掛けました。此の航路こそ全く安全と思ひ居つたことでありますから、暗礁とは意外千萬で、唯不

意にキールの前の方が二つ三つゴツン〳〵とやつたので、驚いて機械を止めました。そうして艦の周圍の水深を測りますと、何れも安全な深さであるが、唯大檣邊の兩舷が較々淺い、それでも艦の吃水よりは若干深かつたのであります。そこで水中に潜りを入れました所が、恰も摺鉢を倒にしたやうな形で、頂上は疊三疊敷程もある平らかさで、周りは急に深くなつて居る暗礁の上に艦の龍骨が乗つて居ることが判りました。幸に艦體には何等損害も受けませずに其の夜の中に降りましたが、仁川への廻航も遲れ、大分困難をしました。之は全く海圖の不完全に歸するのであります。元來指導標を設け、行船法程を指定する際には、相當の吃水を有する船で、實地踏査をなす位の事をすべきものと思つて居りましたので、當時其の事は報告して置きました。

尙一つ自分の記憶に殘つて居る著るしき事は黃海の戰に於て、戰史に載つて居るやうに複雜なる運動を取つたが、敵の陣形如何に依つて、我針路は時々刻々に變じ、旗艦の通跡を進めの信號一つで單縱陣で進みましたが、其の針路は決して十分以上も一定のことはな

い。所が御承知の通り彼の邊一帶は測量が甚だ不完全であつて、何等の目標となるものもなく、殊に海水は濁つて居るので、何時乘上げないとも限らない。敵を北方に見る時は可いが、自分の方が敵より北方にあつた場合は非常に心配であつたのであります。それ故艦隊航海長に自分の意見を申上げましたが、艦隊航海長と雖も、戰術上司令長官のなさる事に喙を容れる譯にも行かない。若しあの時旗艦が海底に膠著して、進退の自由を失つたら、忽ち弱點を暴露して敵の乘ずる所となり、甚だ恐るべきことであつたと思ひます。日露戰爭の日本海々戰の如く、何等さういふ心配のない時は別でありますが、何しろ淺海で地圖の不充分な時は、其の局に當る者は人知れず心配のあるもので、此の點は將來も艦隊を率ゐる上に於て、大に考慮を要することゝ思ひます。特に現役の方に何分かの御參考になれば仕合せと存じます。固より今日は萬事非常に進歩して居りますが、我々は不完全極つた時代に戰爭をして、下らない心配をしたといふ事を此の機會に申上げた次第であります。

次に威海衞の砲擊は例の通り各艦隊毎に砲壘に向つて驀進したのでありますが、距離の

測定に就て非常に苦心したのであります。今日はレンヂ・フアインダーがあつて、而かも二萬米以上も正確に測ることが能きますが、當時は艦隊戰鬪でも全く盲探りであつて、正確に距離を測ることも能きませぬでしたが、先づ其の方法としてはトップの上から敵艦の吃水線と水平線との挾角を測つて、表に照らして距離を知るに過ぎない。卽ちライダー氏のホライゾン・メソツドであります。併し威海衞に於ては此の方法は用ひられませず、色々考へましたが、音響に依る方法を用ひました。御承知の通り音響は風の左右する所がなければ、一秒間にどの位走るといふ一定の距離が判つて居ります。そこで此の距離と秒時との表を作つて置きまして、敵の砲煙が上つた時にストツプ・ウオツチを押し、音の聽えた時迄何秒掛つた、さうすると距離はどの位あるか判るのであります。こんな事は今日より見れば全く笑種でありますが、當時はなか〳〵苦んだのであります。

臺灣の西岸に於て陸軍を援護しました時は丁度日高大將が艦長でありました。地名は記憶しませぬが、中々遠淺で近寄れない、敵を砲擊するには或程度陸岸に近寄らないと打つ

ことも能きませぬし、樣子も判らないで、艦長も御心配になりました。併し斯る場合は乘上げる覺悟で、又乘上げても危害のない程度を注意し、微速力で行動して打つた事もありました。事實一二回は輕く乘上げましたが、何事もなく濟んだのであります。

尙二三氣づいた事もありますが、どうも記憶が不正確で、餘り杜撰な事を申上げ、且規定の時間を超ゆるのも如何かと思ひますので差控へ、是で御免を蒙ります。

戰役中龍田の廻航に就て

（龍田副長海軍少佐）
海軍中將　寺垣猪三

私は龍田の廻航に就て申上げます。私は明治二十七年春龍田艤裝委員として英國に行つたのであります。龍田は御承知の通り九百噸の砲艦であつて、同年七月竣工の豫定を以て英國のアームストロング會社に註文したのであります。所が七月中に竣工すべき筈であるのに色々の故障が出來、機械、汽罐、部屋が半ば出來たのみで、他は一切出來ない。所が海軍省から半ばでも可いから、至急出發させろといふ命令が來ました。而して最初は廻航委員全部を日本より送る筈でありましたが、戰爭の爲めに不可能となつたので、英國人の手に依つて廻航せよといふことで、吾々艤裝委員は亞米利加を經て歸れといふことでありま

したから、アームストロング會社に交渉して、船長以下乘員を雇つて貰ひまして、七月二十九日に會社の職工等を乘せて、ニューカツスル・オン・タインを出たのであります。而して廻航の事に當らしむべき英國人は總て下甲板に入れて置き、私はブリッヂに居つて、職工に舵を取らして出ようとすると、水上警察か稅關かの官吏が來て、其の船はどういふ船か、船長は誰か、何をしに出るかと尋ねますから、目下アームストロング會社に於て製造中の船で、船長は寺垣大尉、出る目的はコンパスの修正であると答へました。又實際コンパスの修正を行つたのであります。それから會社より廻はしてあつた小蒸氣に乘移つて、雇上げた英國人に引渡して、龍田は共の儘日本に向けて出發し、吾々は夜に入つてから密かに共の儘會社に戻り、亞米利加を經て東京に着いたのが黃海々戰の少し前、九月でありましたが、龍田と吾々と孰れが早く東京に着くかと樂しんで歸朝した所が、豈計らんや龍田は亞丁に抑留されたといふことであります。そこで政府から交渉の結果、英國は嚴正中立を守つて居るので、自分の國の人に依つて廻航することは許されない、併し日本人に依つて廻航

するなら抑留を解くといふことになつた。是も大分長い間交渉したやうでありました。其の結果として再び亞丁に行くことになつたのであります。其の時の艦長は向山愼吉君で、丁度私も少佐になつて、詰り少佐が二人乘つた譯であります。十二月十六日と思ひますが、朝顏丸を御用船として百名の兵員を乘せ、亞丁に向つて横須賀を出たのであります。

最初英國は支那に好意を表して居たやうでありましたから、龍田を亞丁で抑留したらしいのですが、九月十七日の黃海々戰の結果、英國の態度は漸々變化を來したやうで、日本人の乘員ならば許すと云ふことになつたやうであります。是に於て御用船の朝顏丸で廻航員全部百名を乘せ、龍田の彈藥其の他軍需品糧食被服を搭載し、又た朝顏丸にも四听半のポートガン四門を裝備し、同船乘員にて萬一の場合に使用すべく其の彈藥も百發ばかり搭載し、船底に假の彈藥庫を造りました。航路の選定には艦長航海長は大に苦心せられ、成るべく本航路を避け、夜は舷燈檣燈の外は減したこともあります。又た日本國旗を揭揚せねばならぬ場合に應ずる爲には、東洋方面に通商するオランダ、スペイン其の他二三國の國

旗を用意し、敵又は敵に好意を持つ國の艦船を欺くつむりでありました。石炭は總て英炭で、朝顏丸の往復用と龍田の廻航に要する全量を搭載し、横須賀を出たのであります。

斯くして丁度新嘉坡沖を通つたのが二十八年一月一日で、それよりマラッカ・ストレートを通り、遙かに古倫母を見て、横須賀から直航し亞丁に着いたのであります。着いてみると龍田はチャンと其處に居りました。そこで艦長が亞丁の知事に交渉した所が、二十四時間內に出港せよといふことでありました。然るに亞丁迄廻航した英人船長の申すには、大變に牡蠣が附着して居つて、速力が減ぜられて居るから、之を落さなければ工合が惡いといふことであります。併し知事に掛合ふのに、牡蠣を落すと言つては許して呉れませぬから、コーキングが惡くて漏水するから、コーキングをさせたい、併し船渠がないから、素潛りでさせるといふ名の下に交渉したら、許して呉れました。そこで亞丁で素潛りの者を雇ひ、一々潛つてスクラッパーを以て引搔き少しづゝ取りましたが、是に彼此二日程費しました。其の間吾々は何か仕事をしたいと思ひましたが、監視されて居りますので、朝顏丸より物を

積込むことが能きなくて、僅かに食糧を少し積んで亞丁を出て、それより阿弗利加北東端のソコトラ・アイランドに密かに入つて、朝顏丸に積んである材木其の外を龍田に移し、乘組員の木工に依つて、航海中倉庫を幾らか仕切ることにし、ハンモック・ネツチングも覆がないので、是も航海中にケンバスで作つたのであります。ソコトラに居る間は無論音信不通であるから、戰況は少しも判りませぬ。然るに龍田は船渠に入れる必要がありますので、ソコトラを出て孟買に向ひました。孟買に着いて、漏水するからコーキングをさせたい、それに就ては船渠に入りたいといつて交渉しましたが、なか〳〵面倒な事を言つて許して呉れない。さうして向ふの檢査官が來て、漏水の箇所を見るといふから——實は何處も漏りはしいが、唯引搔いた位では牡蠣が落ちて居るかどうか判らない、速力も遲いやうな心持がするので、船渠に入る爲めに來たのである。そこで惡い事ではありましたが——底に水を入れて置いて、『此の通り漏る』と申しますと、檢査官も『一晝夜に此の位か』といふから『さうでない、先刻すつかり掃除したのであるが、其の後斯んなに漏つたのである』

と言ふと『それは大へんである、是はどうしても船渠に入れる必要がある、何れ役所に歸つて詮議をするから』といふことになつた。それから『どうか手を洗つて呉れ』と言つて、手を洗ひに行つた時に、金貨を一磅か二磅與へたのです。所が其の翌日外の英國人が來ました。どうも怪しからんと思ひましたが、爭ふべきでないと思つて、早速又水を入れさして、『よく來て呉れた』と言つて見せると、彼も『成るほどパーシー人の檢査官が言つた通り間違はない』と言ふ。『どうか手を洗つて呉れないか』と言つて、丁度好い工合に竹細工の籠があつたから、それに一磅か二磅入れて、『あなたは子供があるか』と尋ねますと、『女の子やら男の子がある』、『そうか、それなら之を上げよう』と言つて其の籠をやりますと、蓋を開けて見て『是は有難い、有難い』と言つて喜んで、其の金貨は早速ポケツトに入れました。詰り是は歐羅巴人だから、少し餘計にやらうではないか、是はパーシーだから一磅で可からうと、此方で値踏みをしてやつたのであります。マア斯ういふ手段を取つて、幸に船渠に入つて出たら、直に出港しろといふことでありましたから、直に出ました。

さうして古倫母に來た所、知事はカンディに行つたと言つて、何時迄經つても糧食、石炭の積込を許して吳れない。さうして水上警察から人が來て、艦の周圍を監視して居つて、何人も交通させない。實は其處で商人より生糧品及石炭も積み、朝顏丸より糧食、彈藥を積みたいと思つたが、何分にも監視をして居るので、積むことが能きない。何度役所に催促に行つても、知事はまだ歸らないと言うて、留守を使つて更に許可して吳れない。其の中に段々日は暮れて來る。そこで氣が付きましたから、監視をして居る巡査即ち其のコクスンに――舵を取つて居るのが英國人で、他は皆土人である――『君上り給へ、あなたは今朝から斯うして附いて居るが、御苦勞千萬だ、腹も空いたらうから、飯でも食つたらどうか』、『それは有難い』と言つて上つて來たから、例の通り手を洗つてはどうかと言ふと手を洗つた。そこで例の通り一磅與へると、急に好意を表する。さうして彼が食事をしてゐる間に『君に折角斯うして食事を上げるけれども、君が許さないから生糧品は一つもない。此の野菜も罐詰、魚も罐詰、肉も罐詰で、洵に氣の毒だ』と申しますと、彼は『イヤ、も

う夜にもなつたし、サンクションがなくても可いから御積みなさい』と言ふ。『さうかそれは有難い、それでは此の處で見て居つて吳れ』、『宜しい自分が見て居る』、斯ういふ話でありましたから、早速ボートを卸して、生糧品、石炭、彈藥其の他の品物を朝顏丸から積始めまして、彼此夜の十一時過ぎになつても、まだ石炭を上甲板に積上げて居りました。所が食糧や彈藥を積みます時に、監視人が一々何か〳〵と尋ねますから、是は海藻だ――海藻といふのもおかしいが、昆布であるとか、是は鮭の罐詰だとか、或は是は鱈の罐詰だとかいひ、『日本人は肉類よりも野菜や魚が好きだ、又なか〳〵旨いよ、君にも一箱やらうか』といふと、『それは有難い』と申しますから、本當の鮭の罐詰の箱をやつたら、多々益々都合が好くなつて、重い彈藥箱も脇見をして吳れました。併し斯ういふ風でありましたから、重いやうな態度をしては工合が惡いので、成るべく輕いやうな風をして、あの十二サンチの彈藥箱なぞはなか〳〵重いが、一番強い者を選出して、二人でハッチの緣迄持つて來るやうにしまして、彼此十一時半頃になりますと、ホールの方から早く出て貰ひたいといふので、

艦長も之を許して十一時半頃出ました。是より先き其處に碇泊中海軍次官より、廣東艦隊が南下した、是は多分龍田襲撃の爲めと思ふから、注意しろといふ電報が來ました。當時航路の豫定はマラツカ・ストレートを通つて、新嘉坡に出る筈でありましたが、さういふ電報が來ましたから、瓜哇の南を通ることにしたのであります。

斯くて古倫母を出て、丁度防波堤の外に出た時に『萬歳〳〵』と言つて、ホールで手を打つて喜んで居る。十二時を打つと嫌つて居る金曜日で、それを十二時前に出たから喜んだのであります。それより赤道直下に行きましたが、洵に天候も好くて、朝顔丸も四所半のボートガンを積んで居りましたので、赤道直下を通る記念として射撃をやらうといふので、醤油樽に旗を立てゝ海に投込み、千米から四千米の距離で射撃をしましたが、龍田は一發も中らないで、朝顔丸のボートガンで標的を破壊したのであります。それからスンダ・ストレートを通ると、瓜哇の前を通らなければならぬので面白くないから、ロンボツク・ストレートを通つた方が可からう、併し其處は非常に困難な所であるから、餘り船が通らない

だらう、其處を通らうといふことで通りましたが、實に甚(ひど)い海峽であつて、龍田は小さいから、ハツチも何も皆閉めましたが、三角浪がプープデツキを洗ふこと度々でありました。それでも漸くセレベスのマカツサルに着きました。其處には日本人としては、洗濯屋とか理髪屋が僅かに四人しか居りませぬでした。此處で和蘭に交渉した所、次の港迄の石炭だけ積むことを許す、併しマカツサルにある石炭はやる譯に行かない、運送船の石炭を積んだらどうかといふことでありましたから、朝顔丸に積んである石炭を、幸ひ監視も居りませぬでしたから、横須賀に到着する迄の石炭を積んだのであります。所がマカツサルとマラツカとを間違へて、東京では餘程心配したやうであります。固よりマカツサルに向けて行くと艦から電報を出して置いたのですが、其のマカツサルをマラツカと解して、マラツカなら古倫母から十節の速力でも十日か八日で着く筈である、それが却々着せないので、どうしたのであらう、或は廣東艦隊に要撃されたのではないかと、本省では非常に御心配になつたやうであります。所が三十日間續航して、三月一日か二日にマカツサルに入りまして、

丁度朝顔丸から石炭を積んで居つた時に、丁汝昌が自殺して、支那艦隊が降伏したといふ電報を受取りました。此のことを發表しますと、朝顔丸の乗組員は萬歳を唱へて非常に喜んで居りましたが、龍田の乗員は一言も發しない。さうして今此の暑い所で汗みどろになつて、一生懸命に石炭を積んだりして居るのは、成るべく早く歸つて、今度の戰爭に參加したい爲めである。然るに今降伏されてはもう終ひである。萬歳所ではない、詰らないと申して居りましたが、何れも忠實にして、立派な精神を有つて居ることに感服したのであります。斯の如くして無事に横須賀に戻つて來たのであります。時間がないので詳しい事は申上げられませぬが、要するに嘘八百で漸く通拔けて來たのであります。是だけを申上げて私の話は終りと致します。尙庄司少將より當時の航海長として、國際關係等に就き御咄がある筈で御座います。

龍田廻航中國際關係等に就て

（龍田航海長海軍大尉）
海軍少將　庄司義基

私は先刻寺垣閣下より御話のありました龍田の航海長兼水雷長でありました。軍艦が半年近くも外國に抑留された事は他邦には其の例もありませうが、帝國軍艦としては是が始めの終りでありませう。

龍田は安社エルズイツク工場にて建造され、時局切迫の爲め工事督促、漸く二十七年七月二十八日、まだ艤裝は完備せざるも、我海軍代表者（遠藤大佐）に於て戰闘航海に差支なきものと認め之を受領し、同日帝國軍艦旗を揭げたのであります。而してタイン・マウスを出發本邦に向ひましたのが、實に宣戰布告の前夜たる七月三十一日の夜半でありました。

英國の中立宣言は其れより一週日の後即ち八月七日に公布され、其の有效期は英本國に在つては同月十二日、海外領地亞丁に於ては同月二十七日からであります。

船長ストラナック氏初め水火夫等の乘員は悉く英國人でありましたが、契約上戰鬪の目的を有せず、交戰の委任などは勿論受けて居りませぬ。單に本邦に公船として回航受渡するものでありました。

斯くして無事にジブラルタル、ポートセードに寄港載炭の上、運河を通過して八月二十五日亞丁着、同二十七日同港英國官憲の抑留する所となり、翌年一月十四日解放、向山艦長に引渡し了る迄約半ケ年間、即ち日清戰役の酣戰期をむざ〳〵異域に空過しましたのであります。

外國にて建造若くは購入の帝國軍艦にして、本邦回航を外國人に委任せるもの、十隻に下りますまい。併し龍田の如く一人の我士官も乘艦せしめなかつたことは皆無かと思ひます。龍田も初めは先發回航委員だけ乘艦せしめようとの議がありましたが、七月二十八日

電命にて、先發員一同乘艦するに及ばざることとなり、戰時に際し全く外國人のみにて回航の途に就きました事が、直接とは云へますまいが因を爲して、抑留の悲運に遭遇したものかとも想像されます。

船長の航泊日誌抄錄に依れば、八月二十五日午後三時三十分亞丁外港に入港投錨直に載炭に着手しましたが、波浪高き爲め石炭船舷側に激衝し、舷梯一個を破壞し、舷側に二三の凹痕を生じたるにより、石炭積入を中止するの已むを得ざるに會し、四時十分船長は入港報告の爲め上陸しました。後ち幾ならずして、英海軍首席將校たるコサック艦長フイッシヤ氏來艦し、乘員を集めて外國從軍律（フオレンエンリストメントアクト）を讀み聞かせました。而して其の樣子たる乘員引續き航海に從事せば、罪科の免れ難きを暗示し恐嚇する如くに見え、尙乘員の上陸して駐在官に就き律令の確否を確むることを勸誘しました。五時外港に於ては到底載炭困難なるを以て內港に錨場を變へ、水線附近の損害個所を修理し、其の成るを俟て載炭せんとしました。二十六日午前六時載炭を始め、正午頃積み終る。此の日朝より上陸する者漸く

多く、其の歸艦するや彼等皆曰く、政務駐在官は彼等に約して曰く、假令如何なる事あるも、契約金は全額を受くる權利を有し、必ず其の支拂を受くるに相違なく、且歸鄉は遭難船員に準じ、旅費の支給も受くべしと。依て船長は安社亞丁代理店主と共に駐在官に對し、其の無稽の保證を爲し、乘員を欺きたるを詰りしに、駐在官は唯其の說明を外國從軍律に觸るゝ事のみに限り、其の他を言はなかつた。此の日から翌日午前にかけ、水火夫其の他船艙手等服務を拒み、退艦する者十餘名を出だす。其の言ひ種さは國法に背き支那人に害せらるゝを好まざるゆゑ、此の上航海を續くことが能きぬと。船長は再三乘員を集め、懇々其の誘惑せられたるを說明しましたが、道理も趣旨も彼等の耳に入らず、二十七日午後には割烹厨宰等も退艦者の群に入つたのであります。

八月二十七日は前述べたる通り、亞丁に於ても中立有效の日でありましたが、午後三時左の出港命令を受領しましたけれども、乘員缺乏の爲めに應ずることが能きなかつたのであります。

本港政務駐在官陸軍少將「ジョップ」ノ命ニ據リ余ハ日本巡洋艦龍田船長「アル・ダブリユ・ストラナツク」ニ本日午後五時ヲ期シ龍田ヲ出港セシメ直に英國領海以外ニ出ヅベキヲ命令シタル事確實ナリ若シ之ヲ執行セザルニ於テハ該艦ヲ以テ女王陛下の任意未決拘留物ト爲ス事ヲ通告ス

右命令書千八百九十四年七月二十七日午後二時亞丁ニ於テ手署シテ交附ス 女王陛下ノ軍艦「コサック」號司令官「フイツシヤ」

午後五時ミルラー大尉武裝の一隊を率ゐ龍田に乘艦押收し、英艦コサック號艦尾の浮標に繫留した。爾後龍田は英兵看守の下に船長運轉士機關士主帳等六名に日傭人夫十五名を役し、艦內外保存に最善の留意努力を爲した。罐水は拔き去り、其のメンホール・ドアは英艦に持ち去つたと云ふ。

偖龍田抑留の報を得るや、直に我公使より英外務大臣に問合せたる理由の要點は、軍艦龍田は英國に於て中立公布の前に我帝國に於て領收し、我國の所有に屬し居るものである。

又乘員は單に同艦を日本へ回航する迄であつて、兵事に關し傭入れたる者ではないから、決してエンリストメント・アクトに抵觸し居るものに非ず云々。終に於て若し果して乘員の同艦回航を忌避承諾せざる場合に於ては、我國より乘員の來る迄、英國政府に於て同艦の保護を爲し呉れ得るや等でありましたが、英國政府は之に答へて、龍田を差押へ海軍官憲の監督の下に置いた。何となれば英國人（乘組）は中立に關し注意を受けたる爲め進航を中止したからである。又亞丁に於て乘組人雇入は許さずと。爾後彼我とも法律顧問等に諮詢疑義を質し、清國公使館共の他外交團の注意環視中に論難反駁、速かに引渡しを請求せる末、十月三十日に至り英國外務大臣キムバレー伯より我內田臨時代理公使宛の答書が來た。其の大要は英政府は龍田差押に關する日本公使の意見を審議熟考したが、本件は最も該艦擔任上の事に屬し、且其の乘員は全く英國臣民であつて、一人の日本士官の之を指揮する者無きに付、本件に關する錯雜の法律問題を此の上攻究討論するも無益であらうとの意見である。日本政府は直に日本士官及龍田を日本へ回航せしむるに充分なる乘員を派遣

せらるゝ趣貴書中に見ゆる故、英政府は日本政府に於て相當の權力を附與したる擔任者着港せば、之に龍田を交附すべしと、在亞丁英國士官へ訓令する心得である。女王陛下の政府は龍田の乘員は該艦を差支なく回航せしむるに足る丈とし、且敵の爲め攻擊せらるゝに非ざれば、日本の一港へ到着するまで、該艦を交戰の用に供せられざる義と推定する云々といふのである。內田公使の意見も英國政府と法律上の見解を爭ふのでもなく、要は彼をして可成急速に龍田を我に引渡さしめ、以て日清戰爭に供用するのが我政府の主意とする所であるから、行掛上此の上彼を追究して論難するは我に於ても却て不得策と考へ、英國政府に送りたる照會文は態と此の點に關し何等論及することなく、全然英政府に同意し、茲に引渡交渉は十月三十一日解決、翌十一月一日遠藤大佐より『英國政府龍田引渡す、回航員至急送れ』との着電あり。二日には向山艦長以下總員八十四名夫々補職の上、同艦回航の爲め亞丁に出張を命ぜられ、十二月十六日非武裝船朝顏丸に搭し、横須賀發亞丁に直航、翌年一月十四日着港龍田を領收し、內訓に從ひ兵員携帶の武器なども箱の儘朝顏丸よ

り積替へ、長旋も碇泊中は揭げず、極めて穩便の處置に出で、十九日出發歸朝の途に就く迄、晝夜兼行艦底附着の蠣殼削除、試運轉其の他の航海準備を整理しました。歸航に方り英國各中立港孟買、古倫母などにて、嚴正と云ふよりは寧ろ苛酷なる取扱を受けたことに就きましては、艦員一同歸心矢の如き場合大に憤慨いたしました。

餘　錄

次に揭出するものは黃海海戰の當時比叡副長たりし海軍中將男爵坂本俊篤氏が差支の爲め本年九月十七日本會主催の下に開かれた懷舊談話會に出席し難いのを遺憾とし、特に寄稿されたものである。措辭流麗一誦壯快を覺ゆると共に當時を追想し、今昔の感轉た禁ず可からざるものがある。

編　者

彈片記

黃海之戰軍艦比叡號挺進將突破敵艦隊中堅脫出其背後偶敵牙艦定遠號所發三十二珊半巨彈中其後檣炸裂亡壹十有七人餘火燒艦焰煙覆海殆與爆沈一髮之間而免耳余對此彈片追懷往事破材狼藉之間伏屍縱橫礮聲殷殷與倒瀾洶洶相和酣戰光景髣髴今尙在目偶際記念日記感云爾

庚戌秋　黃海海戰記念日

俊篤識

題拿破崙言行錄後

一夕、二洲橋畔日本橋倶樂部ニ會ス。海軍少將外波內藏吉、機關少將山崎鶴之助、中佐田中行尙、余ヲ加ヘテ四人タリ。皆二十年前今月今日、黃海ノ戰ニ比叡艦上ニ在テ奮戰シ、

萬死ニ一生ヲ得タル戰友ナリ。此時山崎氏懷ニ小冊子ヲ探リ、余ニ言テ曰、是黃海ノ戰ニ先ダツ一夕、足下ヨリ借覽セルモノ、會マ敵艦定遠號ヨリ發セル巨彈士官室內ニ爆裂シ、十有餘人ヲ殪シ、餘勢延イテ余ガ寢室ヲ破壞シ、室內ノ器物一掃シテ空シ。唯此小冊子恙ナキヲ得タリ。爾來春風秋雨茲ニ二十年、余此ノ小冊子ト離ルルニ忍ビズ、荏苒今日ニ至ル。今此ノ記念スベキ夕ベニ於テ、改メテ之ヲ足下ニ返璧セントスト。余受ケテ之レヲ視ルニ、日淸戰役中日夕舷窓ノ下ニ愛讀セシ拿破崙言行錄ナリキ。紙片色褪セテ、處々忠勇ナル士卒ノ碧血ヲ染メタルモノ、今尙ホ模糊トシテ其痕ヲ印シ、或ハ粉碎セル艦材ノ破片ノ紙間ニ遺留セルナド、歷々トシテ當時戰況ノ凄慘ヲ語ラザルナシ。嗚呼黃海ノ戰後茲ニ二十年、當時紅顏ノ戰友今ヤ髮華新タニ、卓ヲ圍ンデ慘トシテ語ラズ。唯聞ク前庭秋聲梧桐ニ搖ギ、月光地ニ在リ白キコト霜ノ如シ。憶起ス海戰ノ夕ベ、黃海波靜カニシテ、檣頭ノ明月徘徊來ツテ戰友ノ屍ヲ照ス。此時水雷長外波大尉、慨然舷ヲ拍ツテ謠曲曾我ヲ謠フ、其聲凄壯全艦ノ將士爲メニ腸ヲ斷チシコトヲ。余脾ヲ擊ツテ嘆ジテ曰、此ノ記念スベキ夕ベ、此ノ

記念スベキ小冊子ヲ得、余永ク之レヲ珍藏セザル可ラズ。乃チ家ニ歸リ燈ヲ挑ゲテ、其由來ヲ誌ルスト云爾。

大正二年九月十七日第十九回黄海海戰記念會ノタ

軍艦比叡突貫會々員　坂本俊篤誌

詠懷二則

黄海々戰第二十回記念日に當り伊藤佐世保工廠長より左の句を寄せられたり

記念日や老將軍の胸のうち

右返句として

突貫後また二た昔を突貫し

以後更に一と昔を加へ、合せて三昔（みつわかし）の歳月を突貫せる今日の記念日に遭ひ、轉た感慨無量を覺ゆ。

乙丑秋九月黄海海戰記念日與戰友會飲有此作

憶昨蒼溟掣鯨日　北洋戰艦摧成塵　當年意氣今安在　一笑相看鬢似銀

丁提督の官印

粗末なる木製の印ではあるが、明治二十八年二月某日威海衛陥落の時、劉公島の海軍官衙に在つたものを某氏が入手し、之を珍藏してゐたのであるが、本年の黄海海戰記念日に態々携來りて、編者に示されたものである。乃ち乞うて此處にその印影を寫出し、編者の一粲に供することゝした。

大機關士		鈴木三郎
少機關士		平野伊三郎
軍醫長	大軍醫	荻澤貫一
大軍醫		鈴木重治
少軍醫		
主計長	大主計	片桐酉次郎
少主計		伊藤爲之助
少機關士實地研究		山賀代三
少尉候補生		前原庸三郎
同		村上鋹吉
同		伊集院兼誠
同		蜂須賀虎麿
同		平井德藏
		櫻田順三
		淵岡純一郎
	大軍醫	石川詢
		外山亢馬
	大主計	武内錄彌
		田中信吉
		藁谷年實
		阪本武一
		原胤雄
		桑島省三
		小倉寛一郎
		中里重次
		津久井平八
		大橋省
	大軍醫	牧虎文
		山科巖
	大主計	土谷鐵次郎
		南谷良作
		宮川正慶
		千綿義孝
		高原鐵太郎
		向菊太郎
		篠崎眞介
		城戸駒次郎

第一表　豐島海戰參加士官（赤字ハ大正十四年九月十七日調死亡者）

艦名 / 職名	吉野	浪速	秋津洲
司令官	少將 坪井航三		
參謀	大尉 中村靜嘉		
同	釜屋忠道		
秘書	大主計 三村鎮次郎		
艦長	大佐 河原要一	大佐 東郷平八郎	
副長	少佐 山田彥八	少佐 石井猪太郎	
砲術長	大尉 加藤友三郎	大尉 廣瀨勝比古	
水雷長	同 村上格一	同 小花三吾	同 志賀直藏
航海長	同 梶川良吉	同 有馬良橘	同 林三子雄
分隊長	同 吉松茂太郎	同 中村貞邦	同 吉井幸藏
同	同 石田一郎	同 人見善五郎	同 永田廉平
同	同 大立龜吉	同 水町元	同 高松公冬
同	同 一條實輝	心得少尉 岡田啓介	心得少尉 大野仁助
航海士	少尉 木山信吉	少尉 志津田定一郎	同 狹間光太
分隊士	同 加治嘉太郎	同 鈴木多吉	同 有馬律三郎
同	同 井出謙治	同 吉岡範策	同 野中經彥
同	同 野村勉	同 增田敬五郎	同 高久文五郎
同	同 田所廣海	同 佐野常羽	同 本田親民
同	同 淺尾重行	同 湯淺安次郎	同 森弘長一
同	同 山口鋭		
機關長	機關少監 深見鐘三郎	機關少監 山本直德	機關少監 橫山正恭
大機關士 水雷主機兼務	中島與曾八	阪本方吉	山田英之助
大機關士	鈴木三郎	櫻田順三	津久井平八
少機關士	平野伊三郎	淵岡純一郎	大橋省
軍醫長	大軍醫 荻澤貫一	大軍醫 石川詢	大軍醫 牧虎文
大軍醫	鈴木重治	外山亢馬	山科巖
少軍醫			
主計長	大主計 片桐酉次郎	大主計 武內錄彌	大主計 土谷鐵次郎
少主計	伊藤爲之助	田中信吉	南谷良作
少機關士 實地研究	山賀代三	藁谷年實	宮川正慶
少尉候補生	前原庸三郎	阪本武一	千綿義孝
同	村上鋹吉	原胤雄	高原鐵太郎
同	伊集院兼誠	桑島省三	向菊太郎
同	蜂須賀虎麿	小倉寬一郎	篠崎眞介
同	平井德藏	中里重次	城戶駒次郎

第二表　黄海々戰參加士官

（赤字ハ大正十四年九月十七日調死亡者）

職名	名	艦
聯合艦隊司令長官	中將 伊東祐亨	松島
常備艦隊司令官		
參謀長	大佐 鮫島員規	
參謀	少佐 島村速雄	
同	大尉 正戸爲太郎	
航海長	少佐 高木英次郎	
機關長	機關監 湯池定監	
軍醫長	軍醫監 河村豊洲	
書記長	大主計 藤田經孝	
艦長	大佐 尾本知道	
副長	少佐 向山愼吉	
砲術長	大尉 土屋保	
水雷長	同 木村浩吉	
航海長	同 石橋甫	
分隊長	同 志摩清直	
同	同 名和又八郎	
同	同 曾良武雄	
同	心得 少尉 木村剛	
航海士	同 石井力三郎	
分隊士	少尉 井手篤行	
同	同 小林辰之助	
同	同 伊藤滿嘉記	
同	同 笹岡千代松	
同	同 馬場祐内	
同	同 南合源一郎	
機關長	機關監 池田錄太郎	
水雷主機兼務	大機關士 井手潤四郎	
大機關士	松見友吉	
同	同	
少機關士	外波辰三郎	
同	吉松稜威麿	
軍醫長	荻澤貫一	
大軍醫	草野復人	
少軍醫	阿部龍吉	
主計長	淺野勇	
大主計	武井金次郎	
少主計	竹内十次郎	
少尉候補生	百武三郎	
同	湯淺竹次郎	
同	四元賢助	
同	大石馨	
同	中島資朋	

職名	名	艦
艦隊司令長官及司令官幕僚		
參謀長	大佐 横尾道昱	嚴島
參謀	少佐 富岡定恭	
同	大尉 但馬惟孝	
同	同 牧村孝三郎	
同	坂本一	
同	同 毛利一兵衛	
同	同 奥宮衛	
同	同 關野謙吉	
同	心得 少尉 山本菊之進	
同	少尉 平岡貞一	
同	同 下條小三郎	
同	同 松村卯三郎	
同	同 岸久太郎	
同	同 安保清種	
同	同 田代巳代治	
同	同 末松兵市	
機關長	機關監 朝倉俊一郎	
大機關士	大機關士 永瀨猶次郎	
同	武田秀雄	
少機關士	平野宗四郎	
同	松澤敬讓	
軍醫長	大軍醫 天寺祐齊	
大軍醫	山下晉	
少軍醫	望月開作	
主計長	淺野勇	
大主計	武井金次郎	
少主計	竹内十次郎	
少尉候補生	百武三郎	
同	湯淺竹次郎	
同	四元賢助	
同	大石馨	
同	中島資朋	

職名	名	艦
艦隊司令長官及司令官幕僚		
參謀長	大佐 日高壯之丞	橋立
參謀	少佐 酒井忠利	
同	大尉 瀨之口覺四郎	
同	同 横尾純正	
同	同 江口鱗六	
同	同 高橋義篤	
同	同 松村直臣	
同	同 田中盛秀	
同	心得 少尉 町田駒次郎	
同	同 江副峯次郎	
同	同 舟越楫四郎	
同	同 仁禮景一	
同	同 田中耕太郎	
同	同 堀田弟四郎	
同	同 三村錦三郎	
同	同 和田義則	
機關長	機關監 淺田整次郎	
大機關士	大機關士 村田愛吉	
同	市川清次郎	
少機關士	伊達只吉	
同	平塚保	
軍醫長	大軍醫 山崎兵四郎	
大軍醫	關文之助	
少軍醫	鹿野寅吉	
主計長	山崎位	
大主計	長尾耕作	
少主計	河野通雄	
少尉候補生	福地嘉太郎	
同	中村三郎	

職名	名	艦
艦隊司令長官及司令官幕僚		
參謀長	大佐 新井有貫	扶桑
參謀	少佐 新島一郎	
同	大尉 伊地知季珍	
同	同 山本正勝	
同	同 川合冒吾	
同	同 高木助一	
同	同 古谷忠造	
同	同 千坂智次郎	
同	心得 少尉 吉川孝治	
同	少尉 丸橋彦三郎	
同	同 内崎德	
同	同 仁禮景一	
同	同 田中耕太郎	
同	同 堀田弟四郎	
同	同 坂本重國	
機關長	機關監 星野楢吉	
大機關士	大機關士 藤井光五郎	
同	兼常猪三	
軍醫長	大軍醫 壹岐幸存	
大軍醫	中尾太一郎	
大主計	福田芳之助	
主計	佐野雄治	
大主計	齋藤七五郎	
少主計	糸川成太郎	
少尉候補生	遠矢勇之助	
同	山下義章	

職名	名	艦
艦隊司令長官及司令官幕僚		
參謀長	大佐 内田正敏	千代田
參謀	少佐 梨羽時起	
同	大尉 矢代由德	
同	同 津田三郎	
同	同 石井義太郎	
同	同 仙頭武央	
同	同 永原好豊	
同	同 高島萬太郎	
同	心得 少尉 小栗孝三郎	
同	少尉 淺野正恭	
同	少尉 山路一善	
同	同 山崎米三郎	
同	同 野村房次郎	
同	同 三輪修三	
同	同 藤木定吉	
機關長	機關監 秋庭直衛	
大機關士	大機關士 山本一男	
少機關士	酒井邦三郎	
同	中條三郎	
軍醫長	大軍醫 若栗健吉	
大軍醫	五藤兵司	
主計長	田中小太郎	
大主計	中川繁丑	
少主計	增田忠吉郎	
少尉候補生	鎌田政猷	

職名	名	艦
艦隊司令長官及司令官幕僚		
參謀長	心得 少佐 櫻井規矩之左右	比叡
參謀	少佐 坂本俊篤	
同	大尉 大城源三郎	
同	同 外波内藏吉	
同	同 伊藤乙次郎	
同	同 永原好豊	
同	同 高島萬太郎	
同	心得 少尉 小栗孝三郎	
同	少尉 田中行尙	
同	同 原篤慶	
同	同 齋藤兵吉	
同	同 長鋪次郎	
同	同 小川水路	
大機關士	大機關士 山崎鶴之助	
同	同 秀島熊六	
少機關士	安部巽	
同	田村宮太	
同	三宅貞造	
軍醫長	大軍醫 石塚壽太	
大軍醫	大計	

（赤字ハ大正十四年九月十七日調死亡者）

十代田	比叡	赤城	西京丸	吉野	高千穂	秋津洲	浪速
内田正敏	櫻井規矩之左右	坂元八郎太	鹿野勇之進	坪井航三	野村貞	上村彦之丞	東郷平八郎
梨羽時起	坂本俊篤		山内資紀	三村鎮次郎	細谷資氏	中溝德太郎	石井猪太郎
矢代由德	大城源三郎		伊集院五郎	河原要一	築山清智	服部雄吉	廣瀬勝比古
津田三郎	外波内藏吉		新納時亮	山田彦八	小橋篤藏	賀直藏	小花三吾
石井義太郎	伊藤乙次郎		鈴木四教	中村靜嘉	山澄太郎三	林三子雄	有馬良橘
仙頭武央	永原好豊		釜屋忠道	加藤友三郎	高橋助一郎	吉井幸藏	中村貞邦
臼井幹藏	高島萬太郎		山屋他人	村上格一	八代六郎	永田廉平	入見善五郎
淺野正恭	小栗孝三郎		佐藤鐵太郎	梶川良吉	今井兼胤	高松公冬	水町元
山路一善	田中行尚		佐々木廣勝	大田盛實	吉松茂太郎	大野仁助	岡田啓介
山崎米三郎	原篤慶		大田松岡修藏	石田一郎	大立鑑吉	狹間光太	志津田定一郎
野村房次郎	齋藤兵吉		堤虎一郎	木山信吉	小笠原長生	有馬律三郎	鈴木多吉
三輪修三	長鋪次郎		佐藤阜藏	加治嘉太郎	森山慶三郎	荒西鏡次郎	吉岡範策
藤木定吉	小川水路		兼子昱	井出謙治	山岡豊一	野中經彥	高久文五郎
秋庭直衛	田中行尚			野村勉	芳賀玄昱	本田親民	增田敬五郎
山本一男	小栗孝三郎			田所廣海	榊原忠三郎	佐野常羽	湯淺安次郎
酒井邦三郎				淺尾重行	德田道藏	森弘長一	
				山口鋭			
中條三郎	安部巽		船橋善彌	鈴木三郎	金田小太郎	杉定	澁岡純一郎
若栗健吉	田村宮太		眞田義一	中島與曾八	鶴内實太郎	津久井平八	菱谷年實
	三宅貞造		野中英太郎	深見鐘三郎	馬場惟夫	山田英之助	石川詢
			平野伊三郎	山賀代三	岡本鷹雄	櫻田順三	外山亢馬
五藤兵司	石塚鑄太	臼井宏	俵鋼次郎	山本景行	藤田甫	牧虎文	小谷野格治
田中小太郎	山田長保	村田鑑之助	佐藤鉞次郎	鈴木重治	中尾章	山科巖	土谷鐵次郎
中川繁丑	竹内重利	橋口戸次郎	櫻孝太郎	片桐酉次郎	桑島敬直	南谷良策	田中信吉
増田忠吉郎	横山傳			伊藤爲之助	木村金彌	千綿義章	原嵐雄
鎌田政献	市村忠次郎			蜂須賀虎麿	永島粂藏	向菊太郎	小倉寛一郎
				平井德藏	岩田秀雄	篠崎眞介	松永廉雄
				島内桓太	佐々木高志		

第三表　明治二十八年一月三十日威海衛總攻撃參加士官

艦名	職名	筑紫	鳥海	赤城	摩耶	愛宕	大島	武蔵
	艦長	大佐 三善克己	少佐 細谷資氏	少佐 早崎源吾	少佐 橋元正明	少佐 井上良智	少佐 迎敦忠	大佐 伊東常
	副長	大尉 瀧川具和						少佐 吉井幸
	砲術長							
	水雷長							
	航海長	同 井内金太郎	大尉 室田習三	大尉 佐藤鐵太郎	大尉 上村經吉	大尉 橋本又吉郎	大尉 加藤權太郎	大尉 東郷静之
	分隊長	同 和田賢助	同 淺井正次郎	同 佐々木廣勝	同 松本有信	同 安田八東	同 藤井較一	同 西紳六
	同	同 谷雅四郎	同 内田良隆	同 松岡修藏	同 中村虎之助	同 朝倉耕一郎	同 東郷吉太郎	同 中島市太
	同	同 竹内次郎						同 布目滿
	航海士	少尉 秋山眞之	少尉 九津見雅雄	少尉 兼子昱	少尉 西尾雄治郎	少尉 臼井兼太郎	少尉 堀輝房	同 廣瀬弘
	分隊士	同 若林欽						少尉 水科三十郎
	同	同 田中茂藏						同 鈴木岩
	同	同 堀江長吉						少尉 田代愛次
	機關長	大機關士 佐藤躯太郎	大機關士 山上徹	大機關士 平部貞一	大機關士 沖貞	大機關士 坂本鉦五郎	大機關士 近藤兵吉	大機關士 關重
	水雷主機兼務	大機關士 鈴木富三						少機關士 山崎道之
	少機關士	少機關士 黒川己太郎						同 中村正
	軍醫長	大軍醫 村上典表	大軍醫 竹内直與	大軍醫 臼井宏	大軍醫 羽太伊之	大軍醫 藤森朝五郎	大軍醫 岡本覺太郎	同 平野勝
	主計長	大主計 細井彌三郎	大主計 長谷川清吉	大主計 川口秀武	大主計 伴正重	大主計 齋藤鋼太郎	大主計 中島泰藏	大軍醫 木戸龍
	少主計	少主計 小池越藏		少主計 村田鏗之助	少主計 吉田武夫	少主計 内田小三郎		少軍醫 山口猪之
	少尉候補生	少尉候補生 四元堅助						大主計 樋口芳三
	同	同 堀江鶴彦						少主計 澁谷政
								相羽恒

三十日威海衛總攻擊參加士官

（赤字ハ大正十四年九月十七日調死亡者）

耶	少佐 井上良智	大尉 橋本又吉郎	同 安田八東
愛	同 朝倉耕一郎	少尉 臼井兼太郎	大機關士 坂本鈺五郎
宕	大軍醫 藤森朝五郎	大主計 齋藤鋼太郎	少主計 内田小三郎
大	少佐 迎敦忠	大尉 加藤權太郎	同 藤井較一
島	同 東郷吉太郎	少尉 堀輝房	大機關士 近藤兵吉
武	大軍醫 岡本覺太郎	大主計 中島泰藏	大佐 伊東常作
藏	少佐 吉井幸藏	大尉 東郷靜之介	同 西紳六郎
葛	同 中島市太郎	同 布目滿造	同 廣瀨弘毅
城	少尉 水科三郎	同 鈴木岩藏	少尉 田代愛次郎
大	大機關士 關重忠	少機關士 山崎道之助	同 中村正之
和	同 平野勝彦	大軍醫 木戸龍仙	少軍醫 山口猪之吉
天	大主計 樋口芳三郎	少主計 澁谷政次	相羽恒三
龍	大佐 小田亨	少佐 大井上久磨	大尉 柴準一
海	同 栗田伸樹	同 廣瀨順太郎	同 竹下勇
門	少尉 井原賴一	同 小山田仲之丞	同 千秋恭二郎
	同 原要三郎	大機關士 齋藤利昌	同 鹽田誠太郎
	少機關士 貞永得太郎	大軍醫 中島彝雄	少軍醫 執行友次
	大主計 野村金次郎	少主計 佐野廉三郎	中里重次
	大佐 上村正之丞	少佐 中山長明	大尉 上村翁輔
	同 中川藤次郎	同 西垣富太	同 荒畑岩次郎
	同 深川喜文	同 林喜久人	同 片岡榮太郎
	少尉 並木寅之助	同 眞崎安一	少機關士 河井義次郎
	大機關士 伊東茂治	同 川原袈裟太郎	同 南里團一
	同 吉田增次郎	同 堀内三郎	同 河田勝治
	少軍醫 宮川兵市	大軍醫 富松柳三郎	少機關士 丹羽武五郎
	大主計 平井七三郎	少主計 松村駒太郎	正木義太
	加藤壯太郎	大佐 世良田亮	大尉 中野信陽
	同 深川喜文	同 林喜久人	同 片岡榮太郎
	少尉 下平英太郎	大機關士 倉橋半造	少機關士 水谷千萬吉
	同 高野泰吉	大軍醫 淺野勝太郎	少軍醫 藤井保太郎
	大主計 秋山藤吉	少主計 松村駒太郎	八戸三輪次郎
	大佐 矢部興功	大尉 成川揆	同 山口九十郎
	同 今橋安就	同 山本竹次郎	同 山口彌吉
	少尉 平賀德太郎	同 土屋芳樹	同 大宮彭次郎
	同 伊集院兼誠	大機關士 秋田啓太郎	少機關士 大橋省
	大軍醫 石尾正亨	少軍醫 吉村敬次郎	大主計 吉富與兵衛
	少主計 遠藤和平	金丸清緝	

第四表　明治二十八年一月卅日威海衛總攻撃特別任務艦船乘組士官（赤字ハ大正十四年九月十七日調死亡者）

職名／艦名	八重山	磐城	天城	山城丸	近江丸	金剛	高雄
艦長	大佐 平山藤次郎	少佐 柏原長繁	少佐 梨羽時起	大佐 三浦功	大佐 屋形惟善	大佐 片岡七郎	大佐 澤良渙
副長	大尉 有川貞白					少佐 岩崎達人	少佐 矢島功
砲術長				大尉 西山保吉	大尉 牟田寛六	大尉 山下源太郎	
水雷長	同 久保田彦七					同 宇敷甲子郎	大尉 坂元常英
航海長	同 森義臣	大尉 茶山豊也		同 有森元吉		同 江頭安太郎	同 中川重光
分隊長	同 小椋元吉	同 成田勝郎	大尉 秀島成忠	同 三上兵吉	同 荒川規志	同 井手麟六	同 奥宮衛
同	同 大澤喜七郎	同 伊木壯二郎	同 佐久間秀三郎	同 山口泰二郎	同 森越太郎	同 北野脇也	同 市原卯之助
同	同 香月輝彦		同 廣渡渡一			同 松井健吉	同 財部彪
航海士	少尉 奥田貞吉	少尉 相木豊太郎	少尉 平原文三郎	少尉 高橋鈴吉	少尉 土屋林次郎	少尉 中吉忠太郎	少尉 塚本善五郎
分隊士	同 菅一哲一郎		同 久保來復			同 大瀧道助	同 幸田錐太郎
同	同 石井增喜		同 猪山綱太郎	少尉 山崎金一	同 松永光敬	同 菅野勇七	同 峯邊平
同	同 福田昌輝			同 末次直次郎	同 石川長恒	同 野村吉藏	同 鍵和田專太郎
機關長	機關少監 矢部有					同 高橋雄一	
水雷主機兼務	大機關士 入澤敏雄	大機關士 森永賴太郎		大機關士 小栗道孝		大機關士 渡邊壽太郎	大機關士 田邊男外鐵
大機關士	同 島田龜吉					同 中島市右衛門	同 江連磋磨猛
少機關士	少機關士 池田新吉		少機關士 田中安吉		大機關士 瀨戸菊次郎	少機關士 坂本武一	少機關士 上野辰之助 松島純次郎
軍醫長	大軍醫 久保周介	大軍醫 山岸剛五郎	大軍醫 船橋清信	大軍醫 長井又藏		大軍醫 壺岐幸存	大軍醫 佐竹達
大軍醫	少軍醫 木下林之助		少軍醫 鈴木次郎	少軍醫 梶原景清	大軍醫 矢部辰三郎	少軍醫 手塚慎次郎	少軍醫 矢野清史
主計長	大主計 奈良眞韶	大主計 中濱慶三郎	大主計 清水宇助	大主計 富田慶二	大主計 末森鹿之助	大主計 細淵朝正	大主計 安東折枝
少主計	少主計 海老原靖	少主計 不二樹幾之助	少主計 加木茂三郎	少主計 齋藤衛太郎	少主計 武井金次郎	少主計 古賀武四郎	少主計 山崎彦之進
少尉候補生						內藤牧次	館辰三郎
少機關士候補生						二宮恒生	足立藏
						野口勇太郎	富安良一

第五表　威海衛襲撃參加士官及准士官

（赤字ハ大正十四年九月十七日調死亡者）

指揮官	艇名	艇長官姓名	水雷艇隊附	海軍少尉	海軍上等兵曹	海軍機關師
司令少佐	第十三號	大尉 佐伯胤貞		大久保朝德	新納具方	川畑正次郎
	小鷹	同 長井群吉		山崎金一	長島清山	村上常次郎
	第二十三號	同 小田喜代藏		伊東祐保	木村嘉藏	小田切己之次郎
餅原平二	第十二號	同 土屋光金		富士本梅次郎	笹村英助（得心）	遠山治兵衛（得心）
	第七號	同 秀島七三郎		白石直介	川島釘作	大西鐵藏
	第十一號	同 笠間直		齋藤半六	黑田竹次郎	大谷幸兵衛
司令少佐	第二十一號	大尉 吉岡良一		谷村愛之助	杉野重泰	秋山保太郎（得心）
	第八號	同 羽喰政次郎		澤崎寬猛	加藤保太	中山清五郎
藤田幸右衛門	第九號	同 眞野巖次郎		嘉村秀一郎	藤田休太郎	中妻之宗
	第十四號	同 貴島喜太郎		荒川仲吾	折尾芳藏	三富喜三郎
	第十九號	同 岩村團次郎		大山鷹之助	秀山卯太郎	村井精作
	第十八號	同 磯部謙		竹村伴吾	藤井宗恂	望月鐵二郎
司令大尉	第六號	大尉 鈴木貫太郎		篠原利七	上崎辰二郎	椎名鐵藏
今井兼昌	第五號	同 石田一郎		吉田辰男	小野榮槌	水谷辰吉
	第十號	同 中村松太郎		青山芳得	立山岩次郎	山田鶴槌
	第二十二號	同 福島春長		鈴木虎十郎	坂本半八	楠久三郎

第五表　威海衛襲撃參加士官及准士官

（赤字ハ大正十四年九月十七日調死亡者）

指揮官	艇名	艇長官姓名	水雷艇隊附			
			海軍少尉	海軍上等兵曹	海軍機關師	
第十三號	大尉佐伯胤貞	大久保朝德	新納具方	川畑正次郎		
小鷹	同長井群吉	山崎金一	長島清山	村上常次郎		
第二十三號	同小田喜代藏	伊東祐保	木村嘉藏	小田切己之次郎		
第十二號	同土屋光金	富士本梅次郎	笹村英助（心得）	遠山治兵衛（心得）		
第七號	同秀島七三郎	白石直介	川島釘作	大西鐵藏		
第十一號	同笠間直	齋藤半六	黑田竹次郎	大谷幸兵衛		
第二十一號	大尉吉岡良一	谷村愛之助	杉野重泰	秋山保太郎（心得）		
第八號	同羽喰政次郎	澤崎寬猛	加藤保太	中山清五郎		
第九號	同眞野巖次郎	嘉村秀一郎	藤田休太郎	中妻之宗（心得）		
第十四號	同貴島喜太郎	荒川仲吾	哲尾芳藏	三富喜三郎		
第十九號	同岩村團次郎	大山鷹之助	秀山卯太郎	村井精作		
第十八號	同磯部謙	竹村伴吾	藤井宗恂	望月鐵二郎		
第六號	大尉鈴木貫太郎	篠原利七	上崎辰二郎	椎名鐵藏		
第五號	同石田一郎	吉田辰男	小野榮槌	水谷辰吉		
第十號	同中村松太郎	青山芳得	立山岩次郎	山田龜槌		
第二十二號	同福島春長	鈴木虎十郎	坂本半八	楠久三郎		

大正十五年一月十七日印刷
大正十五年一月二十二日發行　非賣品

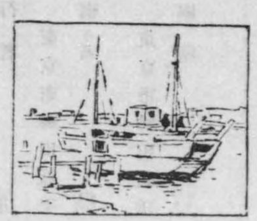
東京府下豐多摩郡中野町大字中野二七三五番地
編輯兼發行者　藤田定市

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷者　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

不許復製

東京市京橋區築地四丁目一番地
發行所　水交社內　有終會
振替東京三四一〇二番



終